類型学研究 (2008), *141-183*

常用漢字の認知文字論的考察
—認知情報単位の類型と分布—

千種 眞一

0．はじめに

文字の認知情報論的な研究は、文字自体の意味認知がどのような情報に基づいてなされているのかという問題を扱うものである。文字学において文字は伝統的に単音文字、音節文字、表語文字に分類されるが、これらの名称からも理解されるように、前の2者は音声表記型の文字であって、各文字が意味を表しているわけではないので、意味の認知論的な研究にとっては二次的な存在である。これに対して、表語文字は言語の基本的な単位である語を表しており、それ自体が同時に意味をも担っているという点で、文字の認知情報論的な研究にとってはもっとも重要な文字であるといえる。

本稿では、現代における表語文字の代表とされる漢字、特に日本漢字を対象にして、文字の認知情報論、あるいはより簡略に言えば、認知文字論の確立をめざして、多角的な分析を試みる。日本漢字の意味認知には訓読みも重要な機能をはたしており、それは音節文字である仮名によっても表記されるから、漢字と仮名の関係や仮名自体の表語性の問題もいずれ扱われねばならないであろうが、本稿ではまず、漢字の認知文字論的な観点から、特に形声文字といわれる漢字の意味認知が実際にどのようになされているのかという問題を扱うことにする。以下において括弧は次のように区別して用いる：漢字［見］、部首【見】、部首名《みる》、音読み〔ケン〕、訓読み〔みる〕（特に語幹と語尾を区別しない）。

漢字は部首によってその意味範疇が縦断的に限定されるが、これに加えて、共通の音符（または声符）が横断的に意味の共通性を示唆していることも漢字の意味の把握にとって重要であることは一般にいわれている。しかし、私たちが漢字の意味を認知するに際して、部首や音符が現実にどのように関与しているかは必ずしも明らかではない。漢字の世界は広大かつ深遠な文字宇宙というべきであり、漢字を構成する要素が幾重にも重なって複雑な体系を形づくっているために、その多層的な構造に人間の認知能力がどのように関わっているかという問題は避けては通れないのであって、その多層的体系性を捉える主要なパラメータとしての部首と音符に対して認知文字論的な研究に期待されるところは大きい。しかし、すべての漢字を考察することが現実にできるわけではなく、認知的な研究にそれが必要というわけでもない。私たちの知っているあるいは使える漢

字の量が個人によって差があるのは当然であるし、知識の質もさまざまであるから、どのような漢字をサンプルとして使用するかによって異なる結果が出てくる可能性は大いにあり得る。

したがって、本研究では、一般的な使用にさらされている常用漢字を取り上げて、結果のぶれが最小限になるようにした。常用漢字はその名が示すとおり、一般の人がさまざまな目的のために常用して読み書く漢字であり、個人差があまり出てこないような漢字リストを構成していると考えられるからである。個人的なレベルでは表外漢字の知識も動員されて意味の認知に役立っているのであるが、表外漢字の知識には個人差が個人の数だけあるので、完全に排除することはできないにしても、データとしては使いにくいし客観性をもたない。むしろその代わりに、本研究でいう「文字表現」が認知文字論的には重要なデータであることを指摘しておきたい。たとえば［白］という文字は常用漢字表では音読み〔ハク〕と訓読み〔しろい〕が認められているが、表外の読みに〔もうす〕がある。しかし、この表外の読みを知らない人は、どのようにしてそうした意味に到達するのであろうか。そのために動員されるのが「文字表現」すなわち当該漢字を含んだ結合表現、いわゆる熟語なのである。＜白状、自白、敬白、告白＞に含まれる［白］が＜白紙、白濁、白髪、紅白、漂白＞に含まれる［白］と明らかに意味が違うことは、これらの文字表現の存在でしか知られない。さらに、＜明白、潔白＞や＜白夜、白昼、白熱＞も微妙に意味が区別されることも、これらの文字表現の日常的な使用から会得されるところであろう。辞典にはあまり記載されていないが、芸能記事などで頻繁に使われる＜激白＞という表現の意味理解も、これらの文字表現の存在が支えとなって達成されていると考えられる。

1．認知情報単位として見た文字と文字単位と文字要素

漢字はいわゆるアルファベットと異なり、重層的な構造をなしている。たとえば、英語の desk は 4 文字からなる 1 語であり、いずれの文字も単に音声を示すだけで意味を持たない。これに対して、漢字［机］は 1 文字 1 語の表語文字であるが、＜木＋几＞という単位からなっており、しかも形声文字と称される漢字では、それを構成する単位が概念範疇を指定する役割と音声を示す役割を担っている。この場合は＜木＞は［机］が材質的に木からできていること、＜几＞は〔キ〕という音を示している。したがって、私たちが漢字を研究する際には、字の形・音・義を三位一体的に考察しなければならず、これに加えて日本語として〔つくえ〕という読みを考慮にいれてはじめて［机］の字の

形・音・義を認知文字論的に考察することが可能となる。ここでいう形とは文字単位の複合体のことであり、いわゆる部首＝意符という単純な等式でとらえるのではなく、認知情報論的な観点からは、部首を意味範疇認知情報単位、音符を音声認知情報単位、訓読語（音読みしかもたない文字・語の場合は音読語）を意味認知情報単位すなわち語と呼ぶことができるであろう。

文字は文字単位からなるが、ここでいう文字単位とは認知のための情報単位、すなわち文字の形・音・義を把握する上で重要な情報単位のことである。文字要素は文字単位を構成する縦線・横線・斜め線・点などのいわゆる「画」からなる一定の形をそなえた集合である。理想的には文字と文字単位・文字要素はつねに明確に区別されて、互いに重なり合うことがないであろうが、実際の認知的な過程ではそうはならない事態も見られる。たとえば［木］と［林］と［森］がそれぞれ 1 文字であることは納得されるが、単位としては［木］1 単位、［林］2 単位、[森]3 単位となるのだろうか。字形を単に分けた結果ということであれば、それでよいかもしれない。しかし私たちのいう単位が認知的情報単位であるとするならば、［木］〔き・モク〕も［林］〔はやし・リン〕も［森］〔もり・シン〕もすべて 1 単位と判断される。［林］は［淋、琳、］のような文字の単位になって、〔リン〕という音符にもなっている。［森］は字形的には＜木＋林＞のように見れば 2 単位、＜木＋木＋木＞のように見れば 3 単位ということになろうが、同様の構成を示す［品］や［晶］にも見られるように、ものが多くあることを表わすので全体で 1 単位とすることができる。こうして［木］は 1 単位 1 要素、［林］は 1 単位 2 要素、［森］は 1 単位 3 要素と数えられる。［森］［晶］のように単独では現れないが、［協］や［脅］や［脇］に見られる要素も同様に理解される。

単位と要素が重なるのは珍しいことではない。もう一つ例を挙げると、艮（うしとら）はそれだけで 1 文字 1 単位であるが、［限・根・痕］などの音符となって「一定のところにとまっていつまでもとれない」意を表わす場合、私たちはこれらの文字の音・義をこの「艮」を手がかりとして認知しているのであるから、それぞれの字を＜阝・木・疒＋艮＞という 2 単位とする。ところがこの艮は単位ではなく要素的に現れることもある。たとえば［懇・墾］では＜心・土＞を除いた上半分が一つのまとまりと感じられる。ただし［艮］はその一部となって音符を構成していると見られるので、この場合は要素レベルに格下げされることになる。

このように文字の認知的なプロセスでは、文字を構成する要素に関して多重的な構造が問題となる場合が少なくない。すなわち(1+1) +1=3 のような構成要素の足し算的なモ

デルではなくて、X(1+1) +Y(1)=Z(2)のように、Xは2要素が合体した時点ですでにただ単にその和というよりもむしろ別物の文字であり、その文字Xは新しい文字Zをつくるための1単位となるという重層的モデルが妥当ではないかと思われる。たとえば［義］は2要素<羊＋我>からなると同時に、それ自体がすでに独立の単体字として存在し、それがさらに［儀、議、犠］などの音符として文字単位の資格をもっているということである。ところが［群］では[羊]は他の単位を構成する要素ではなくそれ自体が単位になっている。このように同じ[羊]が最終的にどのような使われ方をしているかによって要素にもなれば単位にもなるのである。これを逆に言えば、私たちが[議]という文字に出会ったとき、普通これを[言]と[義]には分けても、さらに[義]を[羊]と[我]に分けることはしないということなのである。ちなみに［我］は文字単位として［餓］を構成している。この場合、［我］は［餓］の音声を認知する手がかりとなっているという意味で音符であり、音声認知情報単位と呼ぶことができる。

たとえば「官」は、「棺、館」などの形声文字を構成する1つのまとまった単位、すなわち音符とみなされるから、文字単位としては1単位と認められる。「官」自体は「宀（やね）＋ツイ（つみかさね）」の会意というから、2つの文字要素からなっている。ただし、使用者の意識としてこれが会意文字であって、「家屋に大勢の人が集まったさま」の意であるとは通常認識されていないことと、部首としての《うかんむり》が明らかに認識されていることとは共時的には関係がない。文字単位を構成する要素のどれかが、意符としてであれ音符としてであれ、識別されているならば、それを文字要素とすることはできるだろう。同じことは［化］についてもいえるだろう。この字は「姿を変える、ばける」といった意味をもった音符{カ}として私たちに意識されているという点で、2要素1単位と考えてよいのはなかろうか。あくまでも要素か単位かの判断は、日常的な使用者に委ねられているし、認知的な考察もこうした使用者の意識や判断を重視しなければ成り立たないのである。また、［監、覧、濫、臨］に共通に含まれる上部の「臥」は文字単位としては「臣＋人」として2つと数えることもできるが、通常は字書を参照せずに字形的に「臥」と復元することは難しいから、「臣」が識別される以上、2つの文字要素からなるとは言えるが、文字単位としては1つとするほうが現実的ではなかろうか。同様に［緊、堅、賢］に見られる上部は要素としては［臣］と［又］の2つであるが、これらの合体字を横断的に連係している音符としては1つと見なされるために、これを1つの音声認知情報単位と数える。

漢字の構成単位なり構成要素なりをいくつと数えるかという問題に関しては、認定の

仕方で微妙に異なってくる場合が往々にして見られるのだが、認知文字論的研究においては、漢字の形・音・義に関して該博な字源的知識をもった使用者ではなく、ごく普通の漢字使用者、すなわち原則として常用漢字を習得している使用者、そして現実にはどのくらいの漢字を知っているかということを厳密に知ることは困難であるとしても、常用漢字を基礎としてプラスアルファの漢字を知っている者を対象とすべきであろう。少なくとも漢和辞典などを引かずに、「監」に「臥」が意味的構成要素として認識できる人はそれほど多数存在しているとはいえないのではなかろうか。無論、私たちは通常、漢字の意味や読みを考えるとき、「監」という１文字のみを考えているわけではない。「覧」や「濫」との範列的（paradigmatic）な関係に加え、「監督」や「舎監」といった文字表現としてのいわゆる熟語の統合的（syntagmatic）な関係をも含めて総合的にとらえようとしているのである。そうした認知的プロセスを経ることによって、「皿」や「見」や「氵」が識別されるのであるから、「監」から「皿」を除いた部分が構成単位として認識されるのにさほど時間はかからない。問題は、それが「臥」つまり字書に説かれるように「人が（水鏡に顔をうつして）伏し目で見るさま」と理解しているかどうかなのである。意味的に弁別しているというよりも、むしろ形としてまとまった単位として受け取っているのであろう。語源的に字書の説く通りに教育の現場でも説明がなされているならば、私たちの漢字に関する知識を対象とする認知文字論的な研究はかなり違った様相を呈することになるであろう。ところが現実はこのようになってはおらず、認知文字論が通常の漢字使用者の知識と直観を対象とする限り、文字単位と文字要素の認定に関しては多少の揺れが出てきても不思議ではない。

形と意味との一致が存在するかどうかを決定する重要な違いは、「皿」や「見」や「氵」が訓読的に〔さら〕〔み（る）〕〔さんずい〕として読まれている、すなわち意味的な理解が得られている単位であるのに対して、「監」の上半分は形としては認識されても単位としての名称がないということである。

［感］は＜心＋口＋戈＞で３文字単位とされるが、［咸］［減］［緘］のように音符としての縦断的な共通性から［咸］を１文字単位、［感］を２文字単位とするのが現実的であろう。同様に［各］も２文字単位というよりもむしろ１文字単位とすることができる（cf.［格、閣、客］）。［屋］は＜尸＋至＞で２単位であるが、［握］の音符として働くから１単位と見る。［京］は［魚］と共に［鯨］で２単位、［日］と共に［景］で２単位であり、これに彡《さんづくり》を加えた［影］は［景］が音符に格上げされたかたちになって全体で２単位となるように見えるが、［景］を１単位とみるのではなく、［京

→景→影］のように［京］が音符として連続的に認識されているから、これを基本単位とすることができる。同様に[去→却→脚]。［奇］は<大＋可>という2文字要素からなるが、文字単位としては1つであると考える。字源はどうであれ、これを音の単位として［寄］が作られているからである。つまり［椅、寄、倚、綺］などのように、それが合体字の構成要素として現れる場合は、認知文字論的には音符としての役割を重視してまとまった1つの単位と見ることもできる。また［建］は[筆、律、津]などに共通の要素が認められるために2文字要素＝2文字単位とすることができるが、その一方で[筆、律］には認められるにしてもその共通要素が音として［京］のような共通性を連続的にもたないことを考慮して、[建］自体をさらに部首の添えられた［健、腱、鍵］などに共通する2文字要素1文字単位と見ることもできる。どちらに決定するかは使用者の判断によるのであり、使用者が部首を判断の主材料とするならば前者になろうし、音声面に重きを置くならば後者ということになろう。もちろん一般の人が厳密にどちらかに決めて使用しているということではなく、実際にはそのどちらも意味理解に役立てているにちがいない。どちらか一方に決めたらそれを一貫して判断材料に使うということではなく、時に応じて一方のことがらが主となったり、他方のことがらが優勢となったりするのであろう。筆者は後者の音声重視的な立場に傾いているが、それはたとえば、部首《みず》に属するとされる[求]が語源的には裘（かわごろも）であって、私たちの感覚でも《みず》とは関係がなく、仮借としての〔もとめる〕意のほかには形声字の音符としての役割が前面に押し出されているにすぎないといった印象なども、こうした音声的な連続性に支えられた意味的な連続性によって私たちの漢字理解のプロセスが支えられているのではないかと考えるからである。

表語文字としての資格付与には、その文字に訓読みが与えられて意味が認知されているかどうかということが重要である。たとえば［兄］は会意で字形的には［儿］を含む2要素からなっているが、訓〔あに〕と合体字の音符としての〔キョウ〕によって文字単位としては1とされる。これに対して、［見］は〔みる〕という訓によって私たちはこの文字を理解している。字形的には［兄］と同じように<目＋儿>で2文字要素と見られるが、こうした会意はもはや意識されず、［目］の下の［儿］も文字要素としては確実に存在するが単独には存在しないので［見］を1つの文字単位と考えるのである。〔みる〕という訓読みに支えられた［見］という表語文字の独立性といってよい。

そうした意味で［又］は常用漢字で音読み〔ユウ〕はみとめられず訓読み〔また〕しかないので、表語的であるとはいえるが、実際には「そのうえ、ふたたび」の意で［又］

と表記されることは少なく、それよりも部首【殳】《ほこづくり・るまた》の要素として、あるいは［反，友，収，桑］などの要素として認識されており、表語文字としての存在感は薄い。

会意字でも［岳］＜丘＋山＞のようにその構成単位が明らかに認識されて意味が容易に理解される場合もあるが、［幾］［器］［喜］［貴］［棄］のように【幺】《いとがしら》や【口】《くち》や【貝】《かい》や【木】《き》は見て取れるものの、私たちにとってはこれを分解しても意味の理解に到達しがたいものがあるのも事実であり、字形的には複合的ではあっても文字単位としては１つと見るべき文字ということになる。しかも、形声文字をつくる会意文字の字源は説明を受けてはじめて納得される類のものが多い：［彦］＜文＋彡＋厂＞、［原］＜厂＋泉＞、意＜音（くちをつぐむ）＋心＞。また、会意字［熱］と［勢］には音符の存在は認められないが、共通する上部の字（音ゲイ）は意味的な共通性を保障する要素であるという点で意味認知情報単位といえる。しかし、後述するように，要素が一見共通しているように見えても、意味的な連関が認められないものもある。例えば［替］と［潜］、［舌］と［括，活，憩］と［辞，乱］、［反，板，坂］と［仮（cf. 暇）］。

字形的には複合的で複数単位からなると見られるような文字でも、日本語としての表語文字性の強弱ないしは濃淡によって、その単位性が増減されるようなものがある。たとえば、［卸］は２要素＜卩＋午＞だが常用漢字では訓読み〔おろす・おろし〕のみであって表語性が高く、音読みがないために［御］の音符でもあることは気づかれにくく、２文字単位とされる一方で、［却］は同じく２要素＜卩＋去＞だが音読み〔キャク〕のみで表語性が弱く［脚］の音符としても意識されやすいから１文字単位である。このように部首は共通でもその意味は把握されにくく、訓読の有無によって私たちの認知に差が出てくる場合がある。［印］は会意＜手＋卩＞で文字要素に音読みの手がかりを欠くが、常用漢字としては音訓ともに頻度が高く、表語性も高いので１文字単位と見て異論はないであろう。先述の［岳］は会意で意味の把握は比較的容易であるが、訓読み〔たけ〕に音読み〔ゴク〕を旧字体［嶽］から借りており、訓読みで単独に用いられることがないため表語性が低く、字形的に［山］が下に置かれるのも異例であって１文字単位と見てよいであろう。

［尉］は４要素＜尸＋二＋寸＋火＞で字形的には部首【寸】を右に残りを左に並べているから、常識的には２単位とされようが、この文字自体は常用漢字としては音読み〔イ〕しかなく、表語文字としての性格が弱いのであり、むしろ〔なぐさめる〕と訓読みされる［慰］をつくる音符としての役割が前面に出ているとすれば、［尉］を１単位とする

ことができるのはないか。

2．部首と音符による分類

部首によって意味範疇は横断的に限定されるが，これに加えて共通の音符（声符）が縦断的に意味の共通性を示唆していることが漢字の意味の把握にとって重要であると考えられる。このことを確認するための予備作業として、以下について数値的な検証をしてみることにする。

1．常用漢字を部首で分類してみる。何種類の部首が用いられているか、その割合はどうであるか。
2．常用漢字を音符で分類してみる。そして音読みが同一か、類似しているか、ちがっているか。

2．1　部首による分類

[1画]

一：一、下、且、丘、七、上、丈、世、丁、不、丙、並、万、与 (14) — 丨：中 (1) — 丶：丸、主、丹 (3) — 丿：久、及、乗、乏 (4) — 乙：乙、乾、九、乳、乱 (5) — 亅：事、争、予、了 (4)

[2画]

二：亜、井、巨、五、互、二 (6) — 亠：京、享、交、亭、亡 (5) — 人：以、位、依、偉、億、化、仮、何、佳、価、介、企、会、偽、儀、休、供、仰、偶、係、傾、傑、件、倹、健、個、侯、候、今、佐、債、催、仕、伺、使、似、侍、舎、借、儒、修、住、俊、傷、償、伸、侵、信、人、仁、仙、全、倉、僧、像、促、側、俗、他、体、代、但、値、仲、低、停、偵、伝、倒、働、任、俳、倍、伯、伐、伴、備、俵、付、侮、伏、仏、併、偏、便、保、舗、俸、倣、傍、僕、優、余、僚、倫、令、例 (97) — 儿：兄、元、光、克、児、充、先、兆、党、売、免 (11) — 入：内、入 (2) — 八：共、具、兼、公、典、八、兵、六 (8) — 冂：円、再、冊、両 (4) — 冖：冠、写、冗 (3) — 冫：凝、准、冬、凍、冷 (5) — 几：処、凡 (2) — 凵：凹、画、凶、出、凸 (5) — 刀・刀：割、刈、刊、帰、刑、劇、券、剣、剛、刻、剤、刷、刺、初、剰、刃、制、切、前、創、則、刀、到、判、副、分、別、剖、利、列 (30) — 力：加、劾、勘、勧、勤、勲、功、効、助、勝、勢、勅、努、動、勉、募、務、勇、力、励、劣、労 (22) — 勹：勺、

包、匁 (3)

匕：北 (1) — 匚：匠 (1) — 匸：医、区、匿、匹 (4) — 十：協、午、十、升、千、卒、卓、単、南、博、半、卑 (12) — 卜：占、貞 (2) — 卩：印、卸、危、却、即、卵 (6) — 厂：原、厚、厄、厘 (4) — 厶：去 (1) — 又：反、取、受、収、叔、叙、双、反、又、友 (10)

[3画]

口：哀、員、右、営、可、各、嚇、喝、喚、含、喜、器、吉、喫、吸、叫、吟、句、君、啓、古、呼、呉、口、向、后、号、合、告、唆、史、司、四、嗣、周、召、唱、商、嘱、唇、吹、善、喪、台、嘆、呈、哲、吐、唐、同、否、品、噴、味、名、命、問、唯、吏、和 (60) — 囗：囲、因、園、回、圏、固、国、困、囚、図、団 (11) — 土：圧、域、塩、塊、壊、垣、堪、基、境、均、型、堅、坑、墾、在、執、塾、城、場、壌、垂、塑、増、堕、壇、地、墜、塚、坪、堤、塗、土、塔、堂、培、坂、墳、塀、壁、墓、報、坊、墨、堀、埋、塁 (27) — 士：壱、士、声、壮 (4) — 夂：変 (1) — 夏：夏 (1) — 夕：外、夕、多、夢 (4) — 大：央、奥、奇、契、失、奨、奏、太、大、奪、天、夫、奮、奉、奔 (15) — 女：委、威、姻、嫁、嫌、娯、好、婚、妻、始、姉、姿、女、如、嬢、娠、姓、婿、妥、嫡、奴、婆、媒、妃、姫、婦、妨、妹、妙、娘、妄 (31) — 子：学、季、孤、孔、孝、字、存、孫、妊 (9) — 宀：安、宇、宴、家、寡、害、完、官、寒、寛、寄、宜、客、宮、宰、室、実、寂、守、宗、宿、宵、審、宣、宅、宙、定、寧、富、宝、密、容、寮 (33) — 寸：尉、寺、射、寿、将、尋、寸、専、尊、対、封 (11) — 小：小、少、尚、当 (4) — 尢：就 (1) — 尸：屋、居、局、屈、尺、尽、層、属、展、届、尼、尿、尾、履 (14) — 屮：屯 (1) — 山：岐、岳、岸、岩、峡、崎、崇、島、峠、峰、崩、岬 (12) — 巛：州、巡、川 (3) — 工：工、巧、左、差 (4) — 己：巻、己 (2) — 巾：希、市、師、常、帥、席、帯、帳、帝、帆、布、幅、幣、帽、幕 (15) — 干：干、幹、幸、年、平 (5) — 幺：幾、幻、幽、幼 (4) — 广：庫、広、康、座、庶、序、床、庁、底、庭、店、度、廃、庸、廉、廊 (16) — 廴：延、建、廷 (3) — 廾：弊、弁 (2) — 弋：式、弐 (2) — 弓：引、弓、強、弦、弧、弱、弾、弔、張、弟 (10) — 彡：影、形、彩、彰、彫 (5) — 彳：往、御、径、後、従、循、徐、征、待、徴、徹、徒、得、徳、彼、微、復、役、律 (19) — つかんむり：営、厳、巣、単 (4) — 忄：悦、憶、快、怪、悔、懐、慨、慣、憾、悟、恒、慌、恨、情、性、惜、憎、惰、悼、悩、怖、憤、忙、慢、愉 (25) — 扌：握、扱、援、押、拐、拡、格、核、掛、括、換、揮、技、擬、拒、拠、挙、挟、掘、掲、携、撃、抗、拘、控、拷、才、

採、指、持、捨、手、授、拾、抄、招、承、掌、振、推、据、折、拙、接、摂、措、捜、挿、掃、操、損、打、択、拓、担、探、抽、挑、抵、提、摘、撤、投、搭、把、拝、排、拍、抜、搬、批、披、描、扶、払、捕、抱、撲、摩、抹、揺、擁、抑 (83) — 水・氵・氷：永、泳、液、沿、演、汚、温、河、渦、海、涯、潟、活、渇、滑、汗、漠、汽、求、泣、漁、況、渓、激、決、潔、減、源、湖、江、洪、港、溝、混、済、治、滋、湿、漆、汁、渋、淑、準、潤、沼、消、渉、浄、津、浸、深、水、瀬、清、泉、浅、洗、潜、漸、測、泰、滞、滝、沢、濯、濁、淡、池、沖、注、潮、澄、沈、漬、泥、滴、添、渡、湯、洞、濃、波、派、泊、漠、泌、氷、漂、浜、浮、沸、浦、法、泡、没、満、漫、滅、油、洋、溶、浴、濫、流、涼、涙、浪、漏、湾 (109)

犭・犬：猿、獲、狂、狭、犬、献、獄、狩、獣、状、独、犯、猫、猛、黙、猶、猟 (17)

邑：郭、郷、郡、邪、邸、都、部、邦、郵、郎 (10) — 阝：院、陰、隠、階、隔、陥、隅、険、限、郊、降、際、除、障、陣、随、阻、隊、陳、陶、陪、附、陛、防、陽、陸、隆、陵、隣 (29) — 艸：芋、英、花、荷、華、菓、芽、菊、菌、苦、薫、茎、芸、荒、菜、芝、若、蒸、薪、薦、荘、草、葬、藻、蔵、蓄、茶、著、薄、藩、苗、芳、葉、落 (34) — 辶：違、遺、逸、運、遠、過、還、逆、遇、迎、遣、込、遮、週、述、遵、進、迅、遂、逝、送、遭、造、速、退、逮、達、遅、逐、追、通、逓、適、迭、途、逃、透、道、迫、避、辺、返、遍、迷、茂、薬、遊、連 (48)

[4画]

心：愛、悪、意、慰、恵、応、恩、患、感、忌、急、恐、恭、愚、恵、慶、憩、憲、懸、懇、志、思、慈、愁、心、想、息、怠、態、恥、忠、懲、怒、忍、念、悲、必、慕、忘、悠、憂、慮、恋、惑 (44) — 戈：我、戒、戯、成、戦 (5) — 戸：戸、所、扇、扉、房、戻 (6) — 支：支 (1) — 攴（攵）：改、敢、救、教、敬、厳、故、攻、数、政、整、敵、敗、敏、敷、放 (16) — 文：文 (1) — 斗：斜、斗、料 (3) — 斤：斤、新、斥、断 (4) — 方：旗、施、旋、族、方、旅 (6) — 无（旡）：既 (1) — 日：暗、映、易、暇、旧、暁、景、昆、暫、旨、時、春、旬、暑、昇、昭、晶、是、星、晴、昔、早、替、暖、昼、曇、日、晩、普、暮、暴、明、曜、暦 (24) — 曰：曲、更、最、書、曹 (5) — 月：期、有、月、朝、朕、服、望、朗 (8) — 木：案、栄、桜、横、果、架、机、械、概、楽、株、棺、棋、棄、機、朽、橋、業、極、検、権、枯、校、構、根、査、栽、材、札、杉、枝、朱、樹、柔、松、条、植、森、枢、杉、析、染、栓、桑、巣、槽、束、村、棚、柱、東、桃、棟、杯、梅、板、標、柄、某、棒、木、朴、本、枚、末、未、模、様、来、欄、柳、林、楼、枠 (73) — 欠：欧、歌、款、歓、欺、欠、次、欲 (8)

— 止：歳、止、正、武、歩、歴 (6) — 歹：残、死、殊、殉、殖 (5) — 殳：殴、殺、殻、段、殿 (5) — 毋：毒、母、毎 (3) — 比：比 (1) — 毛：毛 (1) — 氏：氏、民 (2) — 气（きがまえ）：気 (1) — 灬：為、煮、熟、焦、照、然、点、熱、無、烈 (10) — 父：父 (1) — 片：版、片 (2) — 牛・牜：犠、牛、牲、特、物、牧 (6) — 月・肉：胃、育、肝、脚、胸、脅、肩、肯、肢、脂、肖、臓、胎、脱、胆、脹、腸、胴、肉、能、脳、背、肺、肌、肥，腐、膚、腹、胞，肪、膨、膜、脈、有、腰、腕 (36) — 火：炎、煙、火、灰、災、焼、炊、燥、灯、燃、爆、煩、炉 (13) — 爪（爫）：爵 (1)

［5画］

玄：玄、率 (2) — 玉：王、環、球、玉、琴、現、璽、珍、班、理 (10) — 瓦：瓶 (1) — 甘：甘、甚 (2) — 生：生 (1) — 用：用 (1) — 田：異、界、畝、甲、畳、申、男、畜、町、田、畑、畔、番、由、略、留 (16) — 疋：疑、疎 (2) — 疒：疫、疾、症、痴、痛、痘、疲、病、癖、癒、痢、療 (12) — 癶：登、発 (2) — 白：皆、皇、的、白、百 (5) — 皮：皮 (1) — 皿：益、監、盛、盗、盤、盆、盟 (7) — 目：看、眼、県、瞬、盾、真、睡、省、相、着、眺、直、督、冒、眠、盲、目 (17) — 矛：矛 (1) — 矢：矯、矢、短、知 (4) — 石：確、研、碁、硬、砂、砕、磁、硝、礁、石、礎、破、碑、砲、磨、硫 (16) — 示・礻：禍、祈、禁、祭、祉、示、社、祝、祥、神、禅、祖、票、福、礼 (15) — 禾：移、穏、科、稼、穫、稿、穀、私、種、秀、秋、称、穂、税、積、租、稚、秩、程、稲、秘，秒 (22) — 穴：究、窮、空、穴、窃、窓、窒、突、窯 (9) — 立：競、章、端、童、立 (5)

［6画］

竹：箇、管、簡、筋、笑、籍、節、第、竹、築、笛、等、答、筒、篤、箱、範、筆、符、簿 (20) — 米：粧、粋、精、粗、糖、粘、粉、米、粒、糧 (10) — 糸：維、緯、縁、絵、緩、紀、級、糾、給、緊、繰、系、経、継、結、絹、紅、絞、綱、紺、細、糸、紙、紫、終、縦、純、緒、紹、縄、織、紳、績、絶、線、繊、繕、素、組、総、続、締、統、納、縛、繁、紛、編、縫、紡、綿、網、紋、約、絡、緑、累、練 (58) — 缶：缶 (1) — 网・罒：罪、署、置、罰、罷、羅 (6) — 羊：義、群、美、羊 (4) — 羽：羽、翁、習、翻、翌、翼 (6) — 老：考、者、老 (3) — 而：耐 (1) — 耒：耕、耗 (2) — 耳：耳、職、聖、聴、聞 (5) — 聿：粛 (1) — 臣：臣、臨 (2) — 自：自、臭 (2) — 至：至、致 (2) — 臼：興 (2) — 舌：舌 (1) — 舛：舞 (1) — 舟：艦、航、舟、船、艇、舶、般 (7) — 艮：良 (1) — 色：色 (1) — 虍：虞、虐、虚、虜 (4) — 虫：

蚊、蛍、蛇、虫、蛮、融 (6) — 血：血、衆 (2) — 行：衛、街、行、衡、術、衝 (6) — 衣・衤：衣、褐、襟、裁、襲、衰、製、装、袋、衷, 被、表、複、補、褒、裕、裸、裏、裂 (19) — 襾：西、覇、覆、要 (4)

［7 画］

見：覚、覧、観、規、見、視、親、覧 (8) — 角：解、角、触 (3) — 言：詠、謁、課、該、記、議、詰、許、謹、君、訓、計、警、謙、言、誇、語、誤、護、講、詐、詞、試、詩、誌、諮、識、謝、諸、訟、詔、証、詳、譲、診、誠、誓、請、設、説、訴、託、諾、誕、談、調、訂、討、謄、読、認、評、譜、訪、謀、訳、諭、誘、誉、謡、論、話 (62) — 谷：谷 (1) — 豆：豆、豊 (2) — 豕：豪、象、豚 (3) — 貝：貨、賀、貝、貫、貴、賢、貢、購、財、資、賜、質、賞、責、贈、賊、貸、貯、賃、買、賠、販、費、貧、負、賦、貿、賄 (28) — 赤：赦、赤 (2) — 走：越、起、趣、走、超、赴 (6) — 足：距、跡、践、遷、選、足、跳、踏、躍、踊、路 (11) — 身：身 (1) — 車：較、轄、軌、輝、軍、軽、軒、載、軸、車、転、軟、輩、輸、輪 (15) — 辛：辞、辛 (2) — 辰：辱、農 (2) — 酉：酵、酷、酌、酒、酬、醜、醸、酔、配、酪 (10) — 釆：釈 (1) — 里：重、野、里、量 (4)

［8 画］

金：鋭、鉛、鑑、鏡、金、銀、鉱、鋼、鎖、銃、鐘、錠、針、錘、銭、銑、鍛、鋳、釣、鎮、鉄、銅、鈍、鉢、銘、鈴、録 (27) — 長：長 (1) — 門：閲、開、閣、間、閑、関、闘、閥、閉、門 (10) — 隶：隷 (1) — 隹：雅、雇、雌、集、隻、難、雄、離 (8) — 雨：雨、雲、需、震、雪, 霜、電、雰、霧、雷、零、霊、露 (13) — 青：青、静 (2) — 非：非 (1) — 食：飲、餓、館、飢、飼、食、飾、飯、飽、養 (10)

［9 画］

面：面 (1) — 革：靴、革 (2) — 音：音、韻、響 (3) — 頁：額、頑、顔、願、顕、顧、項、順、題、頂、頭、頒、頻、預、頼、領、類 (17) — 風：風 (1) — 飛：飛 (1) — 首：首 (1) — 香：香 (1)

［10 画］

馬：駅、騎、驚、駆、験、騒、駄、駐、騰、馬 (10) — 骨：骨、髄 (2) — 高：高 (1) — 髟：髪 (1) — 鬼：鬼、魂、魔、魅 (4)

［11 画］

魚：魚、漁、鯨、鮮 (4) — 鳥：鶏、鳥、鳴 (3) — 鹿：麗 (1) — 麻：麻 (1) — 黄：黄 (1) — 黒：黒 (1)

［12 画］

黍：麦（1）―　歯：歯、齢（2）

［13 画］

鼓：鼓（1）

［14 画］

鼻：鼻（1）―　斉：斎、斉（2）

［16 画］

龍：竜（1）

常用漢字に見られる部首数は全部で 197 種であり、画数別では次のような分布を示している：［1 画］6 種、［2 画］23 種、［3 画］39 種、［4 画］30 種、［5 画］21 種、［6 画］27 種、［7 画］17 種、［8 画］9 種、［9 画］8 種、［10 画］5 種、［11 画］6 種、［12 画］2 種、［13 画］1 種、［14 画］2 種、［16 画］1 種。したがって［2 画］から［7 画］に多くの部首が集中していることがわかるが、それぞれの部首に属する漢字数にはかなりのばらつきが見られる。［1 画］では【一】《いち》が 14 字で最大であるのに対し、他の 5 部首は 1 字から 5 字に留まっている。［2 画］では【人】《にんべん》が 97 字で、第二位の【刂】《りっとう》の 30 字を大きく引き離している。多数の漢字を含む部首がもっとも集中しているのが［3 画］であり、【氵・氷】《さんずい・したみず》の 108 字を最高に、以下【扌】《てへん》82 字、【口】《くちへん》60 字、【辶】《しんにょう》48 字、【艸】《くさかんむり》34 字、【阝】《こざとへん》29 字と続く。［4 画］では【木】《きへん》79 字を先頭に、【心】《したごころ》44 字、【月】《にくづき》36 字、【日】《ひへん》24 字となっている。［5 画］には突出した部首はなく、【田】16 字、【目】17 字、【石】16 字、【示・礻】15 字、【禾】22 字といった部首が大差なく並んでいる。［6 画］では【糸】が 58 字で、【竹】20 字と【衣・衤】19 字を断然引き離している。［7 画］では【言】が 62 字で抜きん出ており、【貝】28 字、【車】15 字がこれに続く。［8 画］で目立つのは【金】27 字、［9 画］では【頁】《おおがい》の 17 字、［10 画］以下になると【馬】の 10 字が最高であり、1 字しか現れない文字は 10 文字で全体の 3 割弱を占める。

２．２　意味範疇認知情報単位としての部首の認知可能性

漢和辞典の検索にはいくつかの手段があるが、もっとも多用されるのは部首別検索であろう。しかし、部首の中には私たちにとってなじみのあるものもあれば、ある字を見

てすぐには検索しかねるものも多くあるのが実情である。部首に対するこうしたなじみや習熟度の違いが、漢字の認知に影響を及ぼしていることは容易に想像される。検索しにくい理由としては、字形上の独立性が低く文字全体の中に埋没してこれを取り出すことが難しいこと、あるいは常用漢字の中でも当該の部首の頻度がきわめて低いことなどが挙げられる。たとえば、【一】は意味範疇認知情報単位といえるものではなく、文字検索のための指標というべきものである。しかし、画数が一画しかない部首は、それが字の中で埋没しているために、検索指標としての機能も高くない。つまり１画の各部首に属する文字のうち文字が部首それ自体になっている［一］と［乙］以外は、指摘を受けない限りそれと認知することはきわめて難しいのではないだろうか。また【八】に［兼］が属しているとはすぐにわからない。

他方、画数が多いからといって明瞭に部首として認知されるとは限らない場合もある。たとえば［疑］は部首【疋】《ひき》に属するが、これ自体が単独に取り出しにくい部分として存在し、字形的に匕、矢も部首の候補としてあり得るだけでなく、この部首に属する常用漢字はほかに［疎］しかない（位置から《ひきへん》という）、あるいは辞典によって［旋］をこの部首としたり別の部首《方》としたりするという揺れも見られることから、比較的認知されにくい部首であるといえる。このような場合、認知文字論的には同じ部首であっても［疑］を１文字単位、字形的に認知されやすい［疎］を２文字単位とすることができる。字源的な問題ではなく、一般の漢字使用者が当該の文字を実際にどのように認知しているかということが文字単位認定の重要な基準になっているのである。逆に、画数の多い部首はそれ自体が独体字的であるために検索指標としての機能はきわめて低いのであり、それだけに概念範疇認知情報単位としての機能は高いといえる。しかし、【黍】《きび》に属する［麦］、【龍】に属する［竜］は字形上の懸隔が大きく、記憶に頼らざるを得ない。

文字単位認定の重要な手がかりとなる部首には、容易に認知されるものと認知されにくいものがある。前者には部首の形が明瞭なものや概念範疇が明瞭なもの、すなわち具体的な事物を表すものなどが考えられ、反対に後者には部首の形が明瞭に把握できないもの、具体的なイメージを喚起し難いものを表すものなどが考えられる。本来は概念範疇を形象に映し出していた部首が時を経て様式化されるなどして、元来の概念を直接的に喚起できるような個性的な形ではなくなったり、字が部首への改変整理をこうむったりして現在に至っていることが、こうした部首間の認知度の差異をもたらしている。

部首であることが容易に認知されるものには【人、刂、口、土、女、宀、手、山、氵、

草、木、日、月、石、肉、言、糸、金、貝、魚、鳥、鬼】などがあり、名称からも具体的なイメージが喚起されるものである。しかし、実際にはこれらに対して、部首であることが容易に認知されないもののほうが圧倒的に多い。前者は部首の名称からもそうした単位として明確に認知されるゆえに、概念範疇認知情報単位としての機能性が比較的高いといえるが、部首であることが容易に認知されにくい、すなわち部首としての機能性が著しく低いものには、形の独立性が希薄で字全体の中に埋没して、構成要素として認識されることが困難であるものが多い。たとえば、1 画【一】の［一］を除く文字にこれを認知するのはかなりむずかしい。【丨】《ぼう》、【丶】《てん》、【丿】《のかんむり》、【乙】《おつにょう》、【亅】《はねぼう》などは単に要素の形からつけられた部首名であり、意味範疇認知情報単位とみなすことはできない。こうした状況は【二】《に》、【亠】《なべぶた》、【儿】《ひとあし・にんにょう》など 2 画以下の部首にも多数見られる。これを裏返せば、上記の画数別分布に関して指摘された所属漢字の多い部首はそのほとんどが少なくとも意味的に理解されるものであるということである。

また、部首となる要素の位置が一定しないこともある。前述の［疑］は象形字の例であったが、形声字においても部首が全体の中で小さく埋没したり、間に他要素が挿入されたりして目立たなくなり、意味範疇認知情報単位として十全に機能していない場合が見られる。たとえば【力】部の［勝、募、務］、【口】部の［哀、員、呉、嗣、喪、同、吏、和］、【曰】部の［曲、更］、【衣】部の［衰、褒、表、裏］など。［勝、募、務］はそれぞれ【月】部、【草】部、【矛】部と認知される可能性がある。また、［巡］は【巛（川）】部に分類されているが、「辶」を意味範疇認知情報単位、「巛」〔セン〕を音声認知情報単位とする形声字であるから、【辶】とされるべきであろう。［酒］は【酉】《とり》部の会意字として分類されるが、常用漢字でこの部に属する文字は「氵」を偏の位置に持つ［酒］を除いてすべて「酉」を偏として用いるものであり、酒樽を表す「酉」〔ユウ〕が音声認知情報として機能している【氵】部の形声字と見なすのが認知的にはより自然ではないだろうか。また形が似ていて区別がつきにくい部首がある。たとえば【匚】《はこがまえ》と【匸】《かくしがまえ》、【夊】［変］と【夂】［夏］の下部などは字典では別扱いされるが常用漢字では区別されないし、【日】《ひ》と【曰】《ひらび》、【月】《つきへん》と【月】《にくづき》も字形の区別はつかない。

【廾】《にじゅうあし》に属する［弁］は会意字とされるが、もとは辨〔ベン〕を音符として間に［瓜］を挿入する字（たね、はなびら「花弁」）と間に［言］を挿入する字（わかつ、わきまえる、「弁解」）であったものが、略字として同一の字となって、異なる意

味が１文字に混在することになった。

部首が明瞭であっても、その部首に属する文字がすべて同等にその範疇に属するものとして認知されるわけではなく、プロトタイプ的な文字・語と周縁的な文字・語が連鎖的に集合をなしていると考えられる。文字単独だけでなく、文字表現としての熟語などの存在も集合内における文字の中心性と周縁性を決める証拠となる。これを常用漢字中もっとも字数が多く私たちになじみのある部首【水・氵・氷】《みず・さんずい・したみず》に属する文字を例に考察してみよう。

《みず》に属する文字は常用漢字としては 109 字存在する。部首としての【水】《みず》はそれ自体のほかに、【氵】《さんずい》、脚として【氷】《したみず》が構成要素である。これらの漢字に対して、部首が意味範疇の認知情報単位として明瞭に機能しているもの、すなわち「みず」を（イ）、部分的に機能しているもの、すなわち「みずに関わる状態・動き・形状」を（ロ）、その機能がほとんどあるいはまったく認められないもの、すなわち「みずとは無縁のもの」を（ハ）として分類してみる：

（イ）液、汗、漆、汁、水、滝、滴、湯、氷、油、涙、
（ロ）泳、河、渦、海、潟、渇、汽、泣、漁、渓、源、湖、江、洪、港、溝、湿、潤、沼、浄、津、浸、深、瀬、清、泉、浅、洗、潜、沢、濯、池、沖、注、潮、沈、漬、泥、波、漠、泌、漂、浜、浮、沸、浦、泡、洋、溶、浴、流、浪、湾
（ハ）永、沿、演、汚、温、涯、活、滑、漠、求、況、激、決、潔、減、混、済、治、滋、渋、淑、準、消、渉、漸、測、泰、滞、濁、淡、澄、添、渡、洞、濃、派、泊、法、没、満、漫、滅、涼、漏

（イ）に属する漢字数が最も少ないことがわかる。（ロ）と（ハ）はほぼ同数である。したがって、「みず」に直接・間接に関連する文字は全体の半数を超える程度しか見られない。これを予想通りと見るか、意外と見るかは主観も入り判断が難しいが、最も多くの文字をかかえるこの【さんずい】がこの程度であるということは、他の部首に属する文字の事情も大方察せられるであろう。具体的な部首名に属する文字群以外であれば、部首の意味範疇認知情報単位としての機能はさらに低下していると考えざるを得ない。

上記の分類は筆者の内省によるもので、個人によって違いがあるのが当然であって、要するに漢字の認知的意味はこうした変異を免れないと考える。例えば［潟］は『現代国語例解辞典　第二版』では「①遠浅の海岸で、潮の干満によって隠れたり現れたりす

る地。干潟；②浦。湾。入り江；③砂州などが張り出して海と分離してできた湖や沼（例として「八郎潟」）」のように解説されているが、【さんずい】との関わりからいえば、③＞②＞①の順で「みず」との関連性が低くなるように思われる。したがって個人により［潟］は（ハ）と分類されることはなくても、（イ）か（ロ）のどちらに分類されるべきかということに関して客観的な基準はないのであり、使用者は［潟］をどの意味で認知しているかは容易に決定し難く、また実際には文脈によってこれらの意味のどれかが選択されているものと判断される。たとえば［渦、潮、波、浪］などは「みず」そのものの表れであるとすればもっとも（イ）に近い。そして［河、海、湖、沼、池、渓、沢、江、浜、浦、湾］などは「溜まっている・流れているみずを中心として形成された何らかの形」と捉えるならば他のメンバーに比べると（イ）により近いと判断されるであろうし、［濯］［漠］はそれぞれ音読み〔タク〕〔バク〕しかなく、ほとんど「洗濯」「砂漠」という複合語でしか用いられないので、単独語としては影が薄い存在であって（ハ）により近いとされるかもしれない。とくに［漠］は「砂漠」という結合から皮肉にも「水とは無縁の地」という意味で消極的に「みず」との関連が認知されているという意味では興味深い。さらに［泳、漁、浮、沈、潜］などは「みず」がなければ成り立たない動作・出来事であり、動作・出来事といっても［泣］と［洗］では「みず」との関わり方がまったく異なる。こうした一筋縄では処理しにくい複雑な意味的状況に対して、使用者がどのような意味的処理を施して認知に至っているかという問題はきわめて興味あるものであるが、現在のところその解明にはまだ程遠いといわなければならない

［津］が「津々浦々」では（ロ）、「興味津々」では（ハ）となるように、同じ文字でも読みあるいは文字表現によって部首の機能が上下することがある。［沢］は訓読〔さわ〕で（イ）になるが、〔タク〕では「沼沢」と「光沢」「沢山」となって区別が生じる。

（ロ）に属すると見られた漢字も詳しく見てみると、全部が同じレベルで横一線に並んでいるわけではないことが容易に理解されるであろう。おそらく（ロ）の内部でも「みず」との関連性の度合いは多様であり、完全にこれを順序づけることは不可能であるにしても、中心的な意味と周縁的な意味との連続体ととらえるのも１つの有効な方法であろう。そしておそらく（ロ）だけではなく（イ）についても中心的ないし周縁的意味の連続性が想定されるであろうし、これらが全体としてプロトタイプ的意味から周縁的意味へと連続性をなしているのであろう。たとえば［漆］は液状であるために（イ）に分類されているが、これを実際に目にする機会も多くはないのであれば、（イ）に属する他のメンバーよりも「みず」との関連性は低いように思われる。

それは大雑把には感知されていることであるが、そのグループ内部の序列ということになると、個人差が相応に現れてくるのは当然予想されるところである。

（ハ）に分類されたものでも、複合表現に用いられると、部首による概念が幾分かうかがわれるような語も見られる。たとえば、［渉］は〔わたる〕が常用外であるが「徒渉」（歩いて川を渡る）では（ロ）に分類されうる。［渡］も辞書では［渉］とともに見出し語としてあげられており、「渡河、渡し舟」などに「みず」との関連を垣間見せるが、実際の用法は「みず」とは関係なく「移動」一般に拡張されている。［涯］は「水涯」（みずぎわ）を知っている人には（ロ）とも考えられようが、大概の人にとってこの字は「生涯、境涯、天涯」でしか見ることはなく「みず」との関連は認められない。［滋］は表外訓で〔うるおす〕が「滋雨」に現れる程度で「滋味、滋養」ではそれが薄らぐ。［没］は表外訓の〔しずむ〕が〔沈没、水没〕に看取される点で（ロ）との接点をもつが、意味の拡張によって「みず」との関連は薄らいでいる。［漏］は一般に〔もる・もれる・もらす〕の意味に用いるが、文字要素として尸の下に雨が置かれていることからも「みず」との関連が認められる。

２．３　音声認知情報単位としての音符の類型とパターン

以下では、発音を知る手がかりとなる音符がどのような頭子音で共通しているか、あるいはどのような頭子音間の交替が見られるかを調査する。音符が何らかの共通性を示しているならば、パターン認識の可能性が高くなることが予想されるからである。ただし、簡略化のために、拗音は直音と同一のものとして理解する。たとえば漢音と呉音の別であるが、［客］/k(y)aku/、［九、久、宮］/k(y)u(u)/、［去、拠、虚、居］/k(y)o/、［御］/g(y)o/、［業］/g(y)oo/、［砂］/s(y)a/、［主、守］/s(y)u/、［相］/s(y)oo/、［糧］/r(y)oo/、［緑］/r(y)oku/ 。母音はＶと略す。

頭音については、以下のようなタイプに大別される：①母音または子音で始まり他の子音と交替しない；②母音と子音間で、あるいは異なる子音間で交替する。また、大部分の日本漢字音は２モーラからなっており、パターン認識の観点からは、文字全体すなわち頭音を含む第１モーラだけでなくこれに続く第２モーラも重要である。たとえば[安 /a.N/, 案 /a.N/］［東 /to.o/, 凍 /to.o/］はそれぞれ第１モーラも第２モーラも同じであるが、[最 /sa.i/, 撮 /sa.tu/]は第１モーラは同じであるが第２モーラが異なり、[屋 /o.ku/、握 /a.ku/］［滑 /ka.tu/, 骨 /ko.tu/］はそれぞれ第１モーラは異なるが第２モーラは同じであり、［説 /se.tu/, 税/ze.e/］［拡 /ka.ku/, 広 /ko.o/］は第１モーラも第２モーラも

異なるグループである。これらの組み合わせを順に A＝第 1 モーラ同・第 2 モーラ同、B＝第 1 モーラ同・第 2 モーラ異または第 1 モーラ異・第 2 モーラ同、C＝第 1 モーラ異・第 2 モーラ異として、発音を知る手がかりとしての音符の価値がどのようにランクづけされるかも調査してみよう。1 モーラのみの文字は大半が［衣，依］のようにまったく同音であるか、［以，似］のように母音のみが一致しているか、［我，義］のように子音が同じで母音が異なるか、のいずれかであり、それぞれを A、B、C とみなす。まれに見られる［家〔カ・ケ〕，嫁，稼〔カ〕］のようなグループは A とみなす。さらに［愚 /gu/，偶 /gu.u/］や［県 /ke.N/，懸 /ke/］のように第 1 モーラが同音でそれに 1 モーラ分加わって長音や撥音になっているものは B とし、［句 /ku/，拘 /ko.o/］のようなグループは C とする。各グループの前にこれらのアルファベットを記す。

タイプ①

A:［安，案］;［衣，依］;［尉，慰］;［唯，維(②C)］;［員，韻（円，cf. 旧字：圓)］;［永，泳，詠］;［疫，役］;［沿，鉛］;［園，猿，遠］;［化，花，貨，靴］;［可，何，河，荷，歌］;［果，菓，課］;［家，嫁，稼］;［渦，過，禍］;［介，界］;［会，絵］;［戒，械］;［皆，階］;［壊，懐］;［街，涯］;［巻，券，圏］;［貫，慣］;［間，簡］;［還，環］;［机，飢］;［気，汽］;［奇，寄，騎］;［幾，機］;［及，吸，級］;［弓，窮］;［巨，拒，距］;［凶，胸］;［共，供，恭，洪］;［協，脅］;［峡，挟，狭］;［郷，響(②B)］;［境，鏡］;［橋，矯］;［斤，近］;［勤，謹］;［禁，襟］;［区，駆］;［愚，偶，遇，隅］;［屈，掘］;［勲，薫］;［刑，形，型(②C)］;［系，係］;［渓，鶏］;［建，健］;［県，懸］;［倹，剣，険，検，験］;［堅，賢］;［幻，玄，弦］;［戸，雇，顧］;［孤，弧］;［古，固，枯，故，個，湖］;［五，悟，語］;［呉，娯，誤］;［行，衡］［交，効，郊，校，絞］;［坑，抗，航］;［孝，酵］;［更，硬］;［侯，候］;［荒，慌］;［高，稿］;［溝，構，講，購］;［昆，混］;［左，佐，差］;［栽，裁，載］;［彩，採，菜］;［士，仕］;［止，祉］;［氏，紙］;［司，伺，詞，嗣，飼］;［市，姉］;［旨，指，脂］;［志，誌］;［姿，資，諮，次(②B)］;［錯，借，昔，惜，籍，措］;［紫，雌］;［滋，慈，磁］;［舎，捨］;［射，謝］;［守，狩］;［朱，殊，珠］;［取，趣］;［受，授］;［需，儒］;［州，酬］;［秋，愁］;［従，縦］;［宿，縮］;［塾，熟］;［述，術］;［旬，殉］;［盾，循］;［叙，徐，除］;［升，昇］;［庄，粧］;［祥，詳］;［焦，礁］;［章，彰，障］;［乗，剰］;［成，城，盛，誠］;［青，情，清，晴，精，静，請］;［壌，嬢，譲，醸］;［侵，浸，寝］;［唇，娠，振，震］;［辛，新，薪，親］;［垂，睡，錘］;［吹，炊］;［随，髄］;［正，征，政，整，症，証］;［生，姓，性，星，

牲]；[制，製]；[先，洗，銑]；[泉，線]；[善，繕]；[阻，祖，租，粗，組]；[早，草]；[相，想，霜]；[倉，創]；[曹，遭，槽]；[窓，総]；[僧，層]；[操，燥，藻]；[象，像(②B)]；[足，促，速]；[則，側，測]；[堕，惰]；[帯，滞]；[袋，代，貸(②B)]；[第，弟(②C)]；[宅，託]；[担，胆]；[地，池]；[知，痴]；[畜，蓄]；[中，仲，沖，忠，衷]；[兆，挑，眺，跳，逃，桃]；[長，帳，張，脹]；[鳥，島]；[朝，潮]；[澄，登，豆，痘，頭(②C)]；[徴，懲]；[謄，騰]；[呈，程]；[廷，庭，艇]；[低，抵，邸]；[貞，偵]；[帝，締]；[徹，撤]；[吐，土]；[渡，度]；[奴，努，怒]；[東，凍，棟]；[到、倒]；[唐，糖]；[塔，搭]；[動，働]；[忍，認]；[然，燃(②B)]；[悩，脳]；[農，濃]；[俳，排，輩]；[白，伯，拍，泊，迫，舶，百]；[伐，閥]；[半，伴，判，畔]；[比，批]；[非，悲，扉]；[卑，碑]；[表，俵]；[票，漂、標]；[苗，描，猫]；[病，丙，柄（②C)]；[浜，賓]；[夫，扶]；[付，府，附，符，腐]；[布，怖]；[普，譜]；[復，腹，複，覆]；[噴，墳、憤]；[文，紋(②B)]；[併，塀]；[幣，弊]；[偏，遍，編]；[保，褒]；[捕，浦，補，舗]；[包，抱，泡，胞，砲，飽]；[亡，忙，忘，望，妄，盲，網]；[某，謀(②C)]；[冒，帽]；[僕，撲]；[麻，摩，磨，魔]；[末，抹]；[慢，漫]；[民，眠]；[矛，務，霧]；[名，銘]；[明，盟]；[毛，耗]；[愉，諭，輸，癒]；[憂，優]；[羊，洋，養]；[用，庸]；[要，腰]；[揺，謡]；[利，痢]；[里，理，裏]；[立，粒(①C)]；[流，硫]；[良，郎，朗，浪，廊]；[量，糧]；[僚，寮，療]；[緑，録]；[暦，歴]；[練，錬]

B: [因，姻，恩]；[陰，雲]；[隠，穏]；[屋，握]；[音，暗]；[我，餓，義，儀，犠，議]；[滑，骨]；[甘，紺]；[官，棺，管，館，遣]；[願，原，源]；[吉，詰，結]；[査，阻，祖，租，粗，組]；[唆，酸，俊]；[砕，粋，酔]；[祭，際，察，擦]；[最，撮]；[山，仙]；[暫，漸]；[遮，庶]；[出，拙]；[寸，村]；[竹，篤]；[廃，発]；[反，坂，板，版，販，飯，返]；[否，不]；[富，副，幅，福]；[野，予，預]；[倫，輪，論]；[例，列，烈，裂]；

C: [亜，悪]；[偉，違，緯，衛（囲，cf 旧字：圍)]；[意，億，憶]；[英，映，央]；[快，決]；[怪，径，茎，経，軽]；[拡，広，鉱]；[軌，九，究]；[疑，擬，凝]；[喫，契]；[却，脚，去]；[況，兄]；[句，拘]；[敬，警，驚]；[工，功，江，攻，紅，貢，項，空，控]；[詐，作，昨，酢，搾]；[債，責，積，績]；[矢，疾]；[試，式]；[識，織，職]；[七，切，窃]；[宗，崇]；[肖，宵，消，硝，削]；[卓，悼]；[嫡，摘，滴，

適，敵］；［丁，庁，町，頂，亭，停，訂，灯］；［倍，培，陪，賠，部，剖］；［爆，暴］；［避，壁，癖］；［風，凡］；［妹，未，味、魅］；［領，令，冷，鈴，零，齢］；

タイプ②

B: ［以，似 ø/z］；［為，偽 ø/g］；［遺，貴 ø/y/k］；［院，完，冠，頑，元 ø/k/g］；［栄，営，蛍 ø/k］；［易，賜 ø/s］；［延，誕 ø/t］；［炎，淡、談 ø/t/d］；［沿，鉛，船 ø/s］；［援，緩，暖 ø/k/d］；［王，狂，皇 ø/k］；［押，甲 ø/k］；［翁，公、松，訟 ø/k/s］；［横，黄 ø/k］；［加，架，賀 k/g］；［芽，雅，邪 g/z］；［敢，厳 k/g］；［勧，歓，観，権 k/g］；［感，憾，減 k/g］；［漢，嘆，難 k/t/n］；［監，艦，鑑，覧，濫，臨 k/r］；［含，吟，琴，今 k/g］；［眼，銀，限，恨，根，墾，懇 k/g］；［岐，技，支，枝，肢 k/g/s］；［忌，紀，記，起，己，妃 k/h］；［許，午 k/g］；［暁，焼 g/s］［君，郡，群 k/g］；［見，現 k/g］；［兼，嫌，謙，廉 k/r］；［巧，考，拷 k/g］；［綱，鋼，剛 k/g］；［合，答 g/t］；［黒，墨，黙 k/b/m］；［才，材，財 s/z］；［参，惨 s/z］；［桟，残、浅，践，銭 s/z］；［視，示 s/z］；［施，地，池 s/t］；［耳，恥 z/t］；［失，秩，迭，鉄 s/t］；［若，諾，匿 z/d/t］；［寂，叔、淑，督 s/z/t］；［主，住，注，柱，駐 s/z/t］；［寿，鋳 z/t］；［小，少，抄，省，秒，妙 s/b/m］；［召，招，沼，昭，紹，詔，照，超 s/t］；［尚，掌，賞，償，常，堂 s/z/d］；［将，奨，状，壮，荘，装 s/z］；［場，腸，陽 z/t/y］；［争，浄 s/z］；［属，嘱 s/z］；［鐘，童 s/d］；［申，伸，神，紳，陳，電 s/t/d］；［真，慎，鎮 s/t］；［深，探 s/t］；［診，珍 s/t］；［推，唯 s/y］；［夭，笑，奏 s/y］；［遂，隊，墜 s/t］；［聖，呈，程 s/t］；［占，店，点，粘 s/t/n］；［栓，全 s/z］；［戦，禅，単，弾 s/z/t/d］；［僧，層，増，憎，贈 s/z］；［続，読 z/d］；［鍛，段 t/d］；［腸，湯，揚，陽 t/y］；［賃，任，妊 t/n］；［転，伝 t/d］；［途，塗，余 t/y］；［筒，同，洞，胴，銅 t/d］；［屯，鈍，純 t/d/z］；［波，破，婆，皮，彼，披，疲，被 h/b］；［博，縛 h/b］；［帆，凡 h/b］；［般，搬，盤 h/b］；［頒，分，粉，紛，雰，盆 h/b］；［藩，番，翻 h/b］；［晩，勉，免 b/m］；［蛮，恋 b/r］；［秘，必，泌，密 h/m］；［費，払，沸，仏 h/b］；［賦，武 h/b］；［方，芳，放，訪，倣，坊，妨，防，房，肪，紡，傍 h/b］；［奉，俸，峰，棒 h/b］；［門，問，聞 m/b］；［薬，楽 y/r/g］；

C: ［域，惑 ø/w］；［影，京，景；鯨，涼 ø/k/g/r］；［鋭，悦，閲，税，説，脱 ø/s/z/d］；［疫，役 ø/y］；［液，夜 ø/y］；［駅，訳，尺，釈，択，沢 ø/y/s/t］；［謁，喝，渇，褐，掲 ø/k］；［佳，街，涯 k/g］；；［悔，海，梅，敏，侮，毎 k/b/m］；［劾，該，核，刻

k/g]；[害，割，轄　k/g]；[慨，概，既　k/g]；[各，格，閣，客，額、落，絡，酪，略，路，露　k/g/r]；[獲，穫，護　k/g]；[括，活，憩，話　k/w]；[干，刊，汗，肝，幹，岸，軒　k/g]；[勘，堪，甚　k/z]；[基，期，棋，旗，欺，碁　k/g]；[揮，輝，軍，運　ø/k/g]；[魚，漁　g/r]；[仰，迎 k/g]；[耕，井　k/s] [俗、裕，容，溶、浴，欲　z/y]；[告，酷，造　k/z]；[済，斎，剤，斉　s/z]；[至，致，室，窒　s/t]；[始，治，怠，胎，台　s/z/t/d]；[寺，侍，持，時，詩，待，等，特　s/z/t]；[者，煮；暑，署，諸，緒，著，都　s/t]；[勺、酌，釣，的，約　s/t/y]；[種，重，衝　s/z]；[秀，透，誘　s/t/y]；[周，週，彫，調　s/t]；[修，条，悠　s/z/y]；[終，冬　s/t]；[十，汁，針　s/z]；[充，銃，統　z/t]；[植，殖，値，置，直　s/t]；[瀬，頼　s/r]；[是，題，堤，提　z/d]；[逝，誓，折，哲　s/t]；[石，拓　s/d]；[駄，太，大，泰　t/d]；[濯，躍，曜　t/y]；[短，豆，痘，頭　t/z]；[宙，抽，由，油，笛　t/y]；[通，痛，勇，踊　t/y]；[泥，尼　d/n]；[道，導，首　d/s]；[内，納　n/d]；[評，平　h/b]；[赴，朴　h/b]；[募，墓，慕，暮，幕，膜，模　b/m]；[有，賄　y/w]；

音符の種類は 423 種が認められ、漢字の総数は 1273 字であった。漢字のうち形声文字といわれるものは音読みの手がかりを含んでいるが、一般的に用いられる約 2000 漢字のうち、音読みの有益な手がかりを含むものは 25 パーセントに過ぎないとされる。しかし、上記の調査によれば、タイプ①とタイプ②のように、完全な同音だけでなく類似の音も計算に入れると、常用漢字 1945 字中 1267 字で約 65 パーセントを占めており、かなりの数の漢字が私たちに音声情報を認知するための手がかりを与えていることがわかる。

それぞれに属する漢字数は、

タイプ①　A　573 字 (29.5%)　　B　83 字 (4.3%)　　C　112 字 (5.8%)
タイプ②　B　291 字 (15%)　　C　204 字 (10.5%)

である。これらのうちタイプ① A は直音・拗音の区別を考慮に入れなければ完全に同音のグループであり、これが常用漢字全体の約 30 パーセントを占めているという状況はけっして無視できない。ただし、上記の［唯，維(②C)］のような分類に対しては補足が必要であろう。これらは共に〔イ〕と読まれれば①A と分類されるが，前者が〔ユイ〕とも読まれれば、②C と分類される。実際には〔イ〕が「唯々諾々」にしか見られない

ものであっても、同じ音が厳然と存在しているという事実が認知過程には重要であろう。

タイプ②に見られる子音交替の状況を見てみると、少なくとも2グループ間で完全に一致するものを掲げると、以下のような分布であった：

k/g 19, s/t 13, s/z 12, h/b 11, t/y 5, ø/k 5, t/d 4, z/t 3, s/z/t 3, s/d 3, b/m 3, s/z/t/d 2, z/d 2, s/t/y 2, k/b/m 2, k/r 2, k/z 2, d/n 2, ø/s 2, ø/y 2

これらの完全に重なり合うパターンの種類は計 20 種で、これに属するグループ総数は 146 グループであり、1 グループにしか現れなかった交替の種類の合計 35 種すなわち 35 グループの約 4.2 倍にのぼる。しかしながら、これらのパターンでもそれぞれがすべて孤立しているのではなく、たとえばもっとも多くの子音を含むパターン s/z/t/d を基底にするならば、次に多い s/z/t と、そして s/z, s/t, s/d, t/d, z/t, ø/y/s/t とも連鎖的に重なり合っている。さらには、たとえば k/g が ø/k/g や k/g/s と、k/g/s が ø/k/s や k/s と、あるいは ø/k/g/r が k/g/r や r/g や y/r/g と、あるいは k/b/m が b/m と重なるように、完全には一致しなくても部分的に一致するものを考慮に入れると、単独でしか現れないグループの数は著しく減少する。s/z/t/d は 2 グループ間で一致するに過ぎないが、上記のパターンに加え、部分的に重なるものとして s/z/d,　z/d, t/d/z, s/t/d が音声的に関連づけられるとすれば、子音交替のパターンは最初それぞれ別個のものと映った以上に緊密なネットワークを成していると見られるのである。日本語の音韻は母音のみならず子音も数が多くないので、いったん音韻交替のパターンを習得してしまうと、類推はかなり可能であると考えられる。たとえば s/z/t は上の s/z/t/d に共通する 3 子音で重なるが、他方で s/t/n, s/z/y とも重なり、s/t/n がさらに k/t/n と重なり、k/t/n は t/n と重なるといった具合に連鎖的につながっていくのである。このようにして部分的に重なり合う子音交替のパターンとまったく重ならない子音交替はわずかに ø/y/k , ø/k/d, g/z, k/h, k/w, s/b, s/r, b/r, h/m, y/w の 10 パターンだけとなる。母音としか交替しない ø/z, ø/g, ø/t を含めると計 13 パターン、13 グループで字数の合計 38 字しかなく、子音交替を示すタイプ②に属する 495 字の約 8 パーセント弱、タイプ①を含めた全体から見れば約 3 パーセントに過ぎない。子音交替の各パターン自体の一致数は必ずしも多くはないが、部分的な重なり合いによる音声的な連関に基づいて類推を可能にする音声認知情報単位として音符の機能は無視することのできない広範なネットワークを持っているのだと結論することができる。

音符によって示される音の認知には常用漢字だけでなく、人名（芸名や四股名なども含む）や地名の読みもきわめて大きな役割を担っている。たとえば［加，架，賀　k/g］の［賀］は常用漢字で〔ガ〕しか認めていないので、ここではタイプ②のＢグループとしたが、［賀］が〔カ〕と読まれることを知っていればタイプ①のＡグループというランクに近づくことになる。ただし［疫，役］〔エキ・ヤク〕、［郷，響］〔キョウ・ゴウ〕のように、一方の字に２種類の読みが認められてそれが他の字と一致する場合はＡグループとする。また［我］と［義］はそれぞれ独立のグループを特徴づける音符として働いているとも見ることはできるが、認知的には［我，餓］〔ガ〕が［義，儀，犠］〔ギ〕ともつながっているのでＣとする。また［怪，径，茎，経，軽］のように/ke.e/という読みが/ka.i/よりも多数派の読みである場合はＢやＣのランクはつけてあるが、現実的にはＡに近いと認知されているかもしれない。これに類したグループには［各，格，閣，客；額；落，絡，酪，略，路，露］（/C(y)a.ku/が多数派：/ro/）、［干，刊，汗，肝，幹，岸，軒］（/ka.N//ga.N/：/ke.N/）、［官，棺，管，館，遣］（/ka.N/：/ke.N/）、［勧，歓，観，権］（/ka.N/：/ke.N//go.N/）、［忌，紀，記，起，己，妃］（/ki//ko/：/hi/）、［小，少，抄，省，秒，妙］（/syo.o/：/byo.o//myo.o/）、［召，招，沼，昭，紹，詔，照，超　/syo.o/：/tyo.o/］、［嫡，摘，滴，適，敵　/tya.ku/：/te.ki/］、［領，令，冷，鈴，零，齢　/ryo.o/：/re.i/］、［例，列，烈，裂　/re.i/：/re.tu/］、［妹，未，味、魅　/ma.i/：/mi/］、［領，令，冷，鈴，零，齢　/re.i/：/ryo.o/］

［錯，借，昔，惜，籍，措］のように、基本となる音符［昔］が /sya.ku/（呉音）と /se.ki/（漢音）という２通りの読みを持ち、そのそれぞれが下位グループをなしている場合はＡとして扱う。同様の事例は［成 /se.e/ /zyo.o/, 誠, 城, 盛］［青 /se.e/ /syo.o/, 清，晴，精，静，請，情］［正 /se.e/ /syo.o/，征，政，整，症，証］［生 /se.e/ /syo.o/, 姓，性，星，牲］［亡 /bo.o//mo.o/，忙，忘，望，妄，盲，網］。

これに類した下位グループとして、基本的にはＣと分類されているが、一定の音韻対応が認められるために、類推がかなりの程度可能なものがる。それは /Ce.e/ と /Cyo.o/ の対応であり、［経］/ke.e//kyo.o/ のように１文字の中に実現されているものもあれば、［令，領］/re.e//ryo.o/ のように文字間で実現されているものある：［経］、［京，兄］（cf. 形）、［迎，仰］、［井，正，生，声，姓，性，青，政，星、省，清，精］（cf. 成，盛，静）、［丁］（cf. 定）、［兵］、［平，評］（cf. 丙，病）、［名，命，明］、［霊］、［令，領］。これらはそれぞれグループを構成する要素であるから、実際に類推のきく文字数は相当数にのぼるので、音声認知情報単位として大きな機能を担っていることになる。

タイプ②のなかでも交替する子音の数が多いほど、音符としての機能が低下していると見るのが常識的であるが、一概にそうとも言えないところが日本漢字の面白いところである。たしかに音読では漢音や呉音などが混在して一見すると、形声文字が形声文字として十分に機能していないように見えるが、いずれが漢音でいずれが呉音であるかの知識はなくとも、実際には私たちは複数の音読みを身につけているのであり、これは複合語という形で定着している。たとえば［元］は漢音〔ゲン〕と呉音〔ガン〕をもつが、「元首，元気，紀元，元旦，元祖」などの複合語では読みがいずれかに確定しているのであり、これは通常、複数の音読みをもつ字に言えることである。一音のみの漢字ではなく、実際には文字表現という複合語形で用いられることによって、漢字の音読みの多様性に対して使用者があまり抵抗を感じることなく、いくつかの音読みを互いに関連あるものとして認知していることが理解される。

ここでは一応の尺度として第1モーラと第2モーラの音を用いたが、私たちの音声の認知はこれらの単位のみに依存しているわけではない。これらと同じように、あるいはより重要なことが私たちの認知に関わっている。それは中国音韻学における反切法に見られる頭音すなわち《声母》と韻すなわち《韻母》という単位への意識である。たとえば［各，格，閣，客；額；落，絡，酪，略，路，露］は最後の2字を除いても頭子音の種類は k/g/r と多様であるわりには、私たちはそれほどの多様性をあまり実感していない。これは /C(y)a.ku/ という韻の共通性によるものである。私たちは反切という中国音韻学ではよく知られた伝統的な音表示法を知らなくても、言葉遊びなどを通して韻の類似・差異を日常的に意識しているのであり、これが漢字音の認知に大きく影響していることは間違いないところであろう。とくに日本漢字音では撥音〔ん〕に終わるものがこうした韻母の共通性に対する意識に大きく寄与しているように思われる。たとえば［漢，嘆，難］はそれぞれ頭子音が /k/, /t/, /n/ のように異なってモーラ単位で見れば /ka.N/, /ta.N/, /na.N/ で B グループにまとめられるが、韻母単位で見れば /C-aN/ となって共通性がよけいに浮き彫りにされる。同様に［真，慎，鎮］は /C-i N/ で、［占，店，点，粘］は /C-e N/ のように撥音で終わるものだけではなく、［黒，墨，黙］の /C-oku/ のように VCV で共通しているなど、この種の例は数多い。

タイプ①とタイプ②の違いは前者が同一頭母音または同一頭子音であるのに対して、後者が子音の交替であるということであった。したがって、同じ B グループでもタイプ①の音符の方がタイプ②の音符よりも、発音の手がかりとしては有益であると予想されるが、必ずしもそうはならないこともある。たとえば①［砕，粋、酔］②［才，材，財］

はともにBグループだが、/sai/:/sui/ と /sai/:/zai/ の違いを比べてみた場合、どちらのペアが音的に近いと認知されるだろうか。おそらく後者ではなかろうか。それは日本語では同じ形態素が清濁の違いで現れることが多いからである。後者の漢字群に清濁の区別がなされているわけではないが、空 /sora/ と青空 /ao-zora/ のような連濁現象が頻繁であるために、和語でなくても清濁の違いによってこれらの漢字は意味の違いとは関わりなく、同じグループに属しているとみなすことに違和感が生じないのであろう。［参，惨］なども②Bに分類されるが、実際には［惨］は〔サン・ザン〕であるから①Aに近い。この種のグループには下線を引いて注意しておいた。これに対して、語頭の子音が同一であっても、母音の違いは音符の共通性にかなりの違和感を覚えさせる。

2．4　部首と音符のネットワーク

1．部首は表語文字の範疇を表わす標識であるが、その中に多種多様な概念が含まれていることは、上記の《みず》に属する文字の多様さからも容易に理解される。その一方で、漢字の多くを占める形声文字は同じ単位・要素を共通に含むことで音声の同一あるいは類似を示しながら、同時に意味的な特徴も共有していることが知られている。いわば、形・音・義が縦横に交差して、1つの小宇宙を形成しているといってもよい。『説文解字』の「六書」のうち転注は、その意味が不明で古来諸説あり、まだ一致した解釈は得られていないようであるが、白川『常用字解』(2003: 679)では転注を「同じ音符をもつ多くの字が、その音符のもつ意味と音とを共有する関係」とし、たとえばひとつながりに連なったものを侖といい、この侖を字の要素とする字に一貫した意味が与えられているというような関係「倫（兄弟など、なかま）・淪（さざなみ）・綸（より合わせたつりいと）・輪（車の並んだわ）」を『説文』の「同意相承く」と規定できると解釈している。以下に掲げる字間の関係を参照されたい。左端の字が基本となる要素（カッコは部首）。

（艸）【莫】—（日）暮—（土）墓—（力）募—（心）慕—（木）模—（巾）幕—（水）漠—（犬）獏—（肉）膜—（手）摸。

（戈）【戔】（金）銭—（水）浅—（貝）賤—（足）践—（木）桟—（皿）盞—（歹）残—（竹）箋—（食）餞—（糸）綫（線）

（丶）【主】—（木）柱—（水）注—（人）住—（馬）駐—（言）—註

（八）【兼】—（女）嫌—（广）廉（しかし謙で音のみ）

しかし、音符が横断的に意味の共通性を表していると考えることができる集合は実際にはあまり多くはない。それよりもむしろ、音声的な記号すなわち音読みの手がかりを与える機能がまさっているように思われる。たとえば[先，洗，銑]では最初の[先]の音〔セン〕がそれであり、字源的にはつながっているとしても、現在の意識では後の２つの字の意味と関係づけられることはむずかしい。また、上記の例や［化，花，貨，靴，囮，訛］などの集合にはまだ意味的な共通性が取り出せる可能性が残っているものの、むしろそうした意味的共通性を感じ取れない集合のほうが多い。それはむしろ中国における［華］の簡体字の果たす音声表示機能に近い。［工，功，江，攻，紅，貢，項，空，控］のうち［空］〔クウ〕という読みが他の読み〔コウ〕と違っても，［控除］〔コウジョ〕が加われば読みとしては全体的に統一される。ただし、これらの文字群に意味的共通性を感じ取れないのは、日本漢字には音読みだけでなく訓読みが存在し、訓読みによって意味が理解されていることが多いからである。たとえば上記［化，花，貨，靴，囮，訛］では、［貨］を除きそれぞれ〔ばける、はな、くつ、おとり、なまり〕と読まれて意味が理解される。つまり、訓読みによって語が認知されているのである。したがって、［化］が共通に含まれていることと、それぞれ異なる読みをもった異なる語であることの間には認知上の懸隔が存在しており、日本漢字の場合、後者の認知過程が前者の認知過程を凌駕しているために、音声的共通集合であることは感じ取っても、それ以上の認知過程は音符という音声的要素に依存することはないと考えられる。日本漢字の表語性が中国漢字のそれよりも高いことはこうした現象にも見られるのである。

［詐，作，昨，酢，搾（国字)］のように、意味的に関連し合う関係にはなく、音のみで結びついて、もっぱら文字表現の読みに寄与する文字群はかなりある。たとえば[漆，膝］［舎，捨］など。

２．少し内省すれば字源的には関連していることがわかっても、字形の観点から認知的には別字系統とみなされるグループがある：[小，少，抄，省，秒］と［肖，宵，消，硝，削]。また［朕］と［謄，騰］の間に字源的な関連の可能性を見て取る人はきわめて少ないであろう。前者は歴史的な資料あるいは文脈において天子の自称としてしか用いることがなく、後者との意味のつながりがあるとは考えられないからである。[陰］と［雲］も音符［云］を共通に含むが，前者はこの上に［今］をのせており、関係はより間接的である。

３．上記１とは逆に、音声的には関連せずに、意味的な関連で結びつけられる文字群も

ある。たとえば［帰］［掃］［婦］や［乳］［浮］。しかし、これらは共通する単位［箒］や［孚］の摘出を可能にする字源的な知識がなければ容易に関連づけることができないものであろう。後者の場合、当然個人差はあるが、［孵化］という表現を知っていれば、認知はより促進され、少なくとも［浮］の音符として［孚］が認知される可能性が開かれることになる。

また［堕］と［惰］は字形が若干異なるが、音の同一性が「おちる」意を支えている。

４．音符は一見共通に見えても、まったく音の異なる文字群も存在する。たとえば［異］と［翼］;［谷］と［俗，容，欲］。［反，坂，板，版］と［仮］。［唇，娠，振，震］と［農，濃］。［欠］、［軟］と［吹，炊］と［飲］。［舌］と［辞・乱］。［陰，雲］と［転，伝］。［逸］と［免，勉］。また、［瀬］は［頼］を音符として用いているように見えるが、s/r の交替が稀であることも手伝って、両字の音的関連性は希薄である。［練，錬（cf. 諫）］も［東・凍・棟］と音符に用いられる字形は同一だが音的には関係ない。

５．上記４とは逆に、音符は一見共通に見えなくても，旧字の存在がそれらの共通性を支えているような例も見られる。［員，韻］はタイプ①A に分類したが，［円］の旧字が［圓］であることを知っているならば，ランクは下がるが，音符の機能としては広がりが出てくる。同様に［偉，違，緯，衛］に対する［囲，cf. 旧字：圍］。［費，払，沸，仏］では部首を除いた要素は 2 種類認められるが，［仏］の旧字［佛］はまだ一般に見受けられるので、これらの文字間における音符「弗」の存在は認知されるのではなかろうか。また［浜，賓］は共通に〔ヒン〕と読む。［浜］の見かけ上の音符は［兵］〔ヘイ〕であるが、これは旧字［濱］の略字で実際の発音は［賓］によっている。［捕，浦，補，舗］に対して［敷］は旧字［敷］が知られていれば、これらに加えられるであろう。

６．上記２のように、音符がもはや純粋に発音の手がかりを示す手段として存在するとするならば、意味とは関係なく、ただ単に音の連続性を表す可能性も新たに出てくる。たとえば［矢，知，痴，医，疾］というくくり方も不可能ではなかろう。［痴］の旧字［癡］を知っている人は別として、［知］と［痴］の音符要素は明確であり、［矢］を核としてこれらグループ全体の音的連続性が認知される可能性も否定できない。s/t/ø という音交替のパターンも珍しくない。［並］は［竝］であって［普，譜］とは別字であるが、音符［普］の上部が［並］を含んでいるように見え、頭音も /h/ で共通している。［無］〔ム・ブ］は常用漢字では珍しい仮借とされる字、すなわち本来は「舞う」意であったが音を借りて「ない」の意味に用いられて、そのために［舞］〔ブ］は会意字として作られたのであるが、字形的にも［舞］の他に共通する字が見られないので、これらの間には共通

の音符が介在しているとされる可能性が高い。

しかし、認知文字論的な観点から注目すべきことは、訓読みによる意味の認知が語彙の拡大に重要な役割を果たしていることである。たとえば、[町] はいったん〔まち〕と認知されれば「町内、町長、町人、町村」など語彙の拡大につながる。それだけではなく、[町] の音読み〔チョウ〕から「丁、庁、頂」、さらには「亭、停」などへ同じ音符をもって同一もしくは類似の発音をもって結びつけられていることが、意味的な共通性の十分な認知には至らないまでも、語形の上では関連がないにもかかわらず、高度に有機的に結ばれた派生ともいうべき機能によって語彙拡大に重要な貢献をなしていることも忘れてはならない。語彙が拡大するということは意味の認知が促進されていることに他ならないからである。

3．意味の認知と音訓の関係およびその類型

先に述べたように、表語文字としての資格付与には、その文字に訓読みが与えられて意味が認知されているかということが重要である。日本の漢字には、多くの場合、音と訓が存在する。[山] という字は音「サン」という音形でも認知されるし、訓「やま」という音形でも認知される。しかし「やま」という音形はそのまま意味それ自体として理解されるのに対し、「サン」はこれだけで意味理解が行われているとはいえない。日本語では漢字が音読みだけで単独に使われることはあまりなく、多くは二字熟語の前分か後分として使われてはじめて語として認知される。その場合でも、音読みだけで理解しているのではなく、音読みを訓読みに変換処理して、意味の認知が達成されていると考えられる。たとえば、[海底]（文字表現）→「カイテイ」（音声化）→「うみのそこ」（意味の認知）、「塩田」→「エンデン」→「しおのた」。このように、音と訓の両方をもちながら、意味の把握には訓がそのまま役立っている場合が多い。

意味の認知に関して、訓がもっとも重要な要素であるとするならば、訓読みしか持たない字の認知がもっとも容易であるということになる。音読みを介さずに訓読みがそのまま意味になるからである。逆に、常用漢字表内でも音読みしかもたない単独語は意味の認知にもっとも抵抗することが予想される。だとすれば、純粋に単独で使われることはなく二字熟語の要素として、あるいは一語でも「軌を一にする」「功を奏する」「亀の甲より年の功」「才におぼれる」「体よく断る」「宙に浮く」「毒にも薬にもならない」「念を押す」「魔がさす」「脈があがる・ある」などのように、慣用的・固定的な表現で現れるのが普通である。しかし、後述するように、音読語でも [勘] [気] [質] [点] などは

単独で用いることができ、したがって訓読語のように感じられている語も多数ある。常用漢字表内では音読しか認められていない漢字でも、表外では訓をもつ語は数多くあり、それらは頻出する熟語とともに表外訓をも喚起することによってかなり意味の認知に成功することができる。これに対して、後述するように、表外でも訓をもたない完全な音読語は音それ自体が意味として直接的に認知処理されていると考えられる。

では、常用漢字で音と訓がどのように分布しているかを調べてみよう。その上で、漢字の意味の認知に音と訓がどのように関与しているかを見てみる。以下の表では次のことに注意されたい。例えば［囲］の「かこむ、かこう」（自動詞・他動詞）、［陰］の「かげ、かげる」（名詞・動詞）、［温］の「あたたかい、あたたまる」（形容詞・動詞）などのように同一語幹は１訓とみなす。［貴］は「たっとい、とうとい」は１訓とみなす。また［疫］は〔エキ、ヤク〕、［仮］は〔カ、ケ〕の２通りの読みがあるが、〔ヤク〕は疫病神、〔ケ〕は仮病に限られた特殊な読みではあっても別の１音とみなす（同様に［益］〔エキ、ヤク〕、［夏］〔カ、ゲ〕、［回］〔カイ、エ〕、［街］〔ガイ、カイ〕、［眼］〔ガン、ゲン〕、［期］〔キ、ゴ〕）。四角のマスに囲まれた漢字は【さんずい・したみず】に属する文字である。

常用漢字における音と訓の分布

１．音のみ：亜、愛、圧、案、以、医、依、委、威、胃、為、尉、意、維、遺、緯、域、壱、逸、姻、員、院、韻、宇、英、衛、疫、益、液、駅、悦、謁、閲、宴、援、演、王、凹、央、応、往、欧、翁、億、憶、乙、恩、可、佳、科、菓、貨、禍、寡、箇、課、画、賀、雅、餓、介、拐、界、械、絵、階、劾、害、涯、慨、該、概、拡、格、核、郭、較、閣、嚇、穫、括、活、喝、褐、轄、刊、缶、完、官、看、勘、喚、敢、棺、款、閑、寛、感、漢、歓、監、憾、還、館、簡、観、艦、鑑、頑、気、岐、希、汽、奇、季、紀、軌、規、揮、期、棋、棄、騎、宜、義、儀、擬、犠、議、菊、吉、喫、却、客、旧、級、糾、給、巨、拠、虚、距、漁、凶、京、享、協、況、峡、郷、局、斤、均、菌、禁、緊、吟、銀、区、句、具、偶、遇、屈、訓、勲、軍、郡、刑、系、径、啓、渓、景、慶、警、芸、劇、傑、件、券、県、倹、圏、検、献、権、憲、謙、顕、験、玄、孤、弧、個、庫、午、呉、娯、碁、護、工、孔、功、甲、后、坑、孝、抗、拘、肯、侯、恒、洪、皇、郊、校、航、康、項、鉱、酵、稿、衡、講、購、号、拷、剛、豪、克、穀、酷、獄、昆、婚、紺、墾、佐、査、詐、才、宰、栽、斎、債、歳、材、剤、財、昨、索、錯、冊、察、雑、桟、算、賛、暫、士、史、司、

祉、肢、師、視、詞、嗣、詩、資、誌、児、滋、磁、璽、式、識、軸、疾、質、舎、赦、邪、勺、尺、釈、爵、朱、珠、需、儒、樹、囚、宗、週、衆、銃、叔、淑、粛、塾、術、俊、旬、准、殉、純、循、順、準、遵、処、庶、署、諸、如、序、叙、徐、匠、抄、肖、尚、昭、将、症、祥、渉、章、紹、訟、掌、晶、硝、粧、証、象、奨、彰、衝、賞、礁、冗、条、状、浄、剰、壌、嬢、錠、嘱、職、臣、信、娠、紳、審、仁、迅、陣、帥、粋、睡、随、髄、枢、崇、寸、是、制、姓、征、性、斉、牲、聖、精、製、税、斥、析、隻、席、績、籍、拙、窃、摂、宣、栓、旋、践、銑、線、遷、繊、然、禅、漸、祖、租、素、措、塑、壮、荘、曹、創、僧、想、層、総、槽、燥、像、臓、即、則、俗、族、属、賊、卒、存、他、妥、堕、惰、駄、対、胎、泰、逮、隊、態、台、第、題、宅、択、卓、拓、託、濯、諾、達、丹、単、胆、誕、団、段、談、壇、地、痴、稚、畜、逐、秩、窒、茶、嫡、宙、忠、抽、衷、駐、貯、丁、庁、帳、脹、腸、跳、徴、勅、朕、陳、賃、墜、呈、廷、抵、邸、亭、貞、帝、訂、逓、停、偵、艇、適、迭、哲、徹、撤、典、点、展、電、斗、徒、途、奴、到、党、陶、塔、搭、痘、糖、謄、騰、胴、堂、銅、匿、特、督、徳、篤、毒、凸、屯、弐、肉、尿、妊、寧、念、能、脳、農、把、派、覇、婆、肺、俳、排、輩、倍、陪、媒、賠、伯、拍、舶、博、漠、爆、鉢、発、伐、罰、閥、判、版、班、畔、般、販、搬、頒、範、繁、藩、晩、番、蛮、盤、妃、批、披、非、碑、罷、微、泌、百、票、評、標、秒、賓、頻、敏、瓶、不、扶、府、附、婦、符、普、膚、賦、譜、武、部、封、服、副、復、福、複、雰、墳、丙、兵、陛、塀、幣、弊、遍、弁、勉、舗、簿、邦、滋、胞、俸、砲、坊、肪、某、剖、帽、棒、貿、朴、僕、撲、没、奔、凡、盆、摩、魔、毎、枚、墓、膜、抹、万、慢、漫、未、魅、密、脈、妙、盟、銘、模、妄、盲、耗、猛、紋、厄、役、約、愉、輸、癒、唯、有、幽、悠、郵、猶、裕、融、予、洋、容、庸、陽、擁、曜、翌、羅、酪、覧、濫、欄、吏、理、痢、陸、略、隆、硫、虜、了、両、料、猟、僚、領、寮、療、厘、倫、累、塁、類、令、礼、零、隷、齢、歴、列、烈、廉、錬、炉、労、郎、浪、廊、楼、録、論、枠、湾（下線を引いた漢字あるいは【さんずい】では網掛けされた漢字は複数の読みを持つ）

2．訓のみ：扱、芋、虞、卸、蚊、貝、垣、掛、潟、且、株、刈、繰、込、崎、咲、皿、芝、据、杉、畝、瀬、滝、但、棚、塚、漬、坪、峠、届、箱、畑、肌、姫、堀、又、岬、娘、匁、枠

3．１音１訓：（「水」部のみ）永、泳、沿、温、河、渦、海、渇、汗、求、名、劇、決、潔、減、源、湖、江、港、溝、混、済、湿、漆、汁、渋、沼、津、浸、深、水、泉、

浅、洗、測、滞、沢、濁、淡、池、沖、注、潮、澄、沈、漬、泥、添、渡、湯、洞、濃、波、泊、漂、浜、浮、沸、浦、泡、満、滅、油、溶、浴、涼、涙、漏

4．１音複訓：映、栄、汚、嫁、過、開、懐、角、覚、割、滑、干、陥、危、偽、魚、供、狭、脅、教、仰、苦、空、結、嫌、厳、交、好、更、幸、紅、香、降、絞、細、裁、産、指、試、若、主、守、集、酬、縮、出、潤、初、助、小、少、床、消、笑、勝、焦、傷、上、常、食、触、新、親、数、盛、請、折、占、染、戦、潜、操、増、足、速、怠、担、探、端、断、弾、値、恥、遅、着、著、調、通、滴、転、怒、逃、凍、得、難、入、乳、背、肥、費、氷、表、病、負、浮、覆、粉、並、柄、閉、辺、捕、暮、抱、訪、暴、鳴、面、優、揺、来、頼、冷、老、和

5．複音１訓：悪、右、易、仮、夏、会、回、解、街、楽、眼、九、宮、去、御、業、極、金、恵、経、月、元、己、口、黄、興、合、今、作、惨、子、施、示、次、自、執、蛇、拾、柔、色、織、神、人、図、世、清、西、相、装、率、太、体、大、代、男、定、都、土、登、読、白、伴、板、貧、物、分、文、聞、米、便、望、木、末、無、名、命、由、流、力、鈴、霊

6．複音複訓：音、下、家、外、間、強、競、形、言、後、行、治、十、重、女、正、生、省、直、殿、頭、日、平、歩、明

これらの内訳は次の通りである：音のみ 734 字、37.7%；訓のみ：40 字、2.1%；1 音 1 訓：941 字、48.4%；1 音複訓：126 字、6.5%；複音 1 訓：81 字、4.2%；複音複訓：24 字、1.2%。音読みしかもたない文字の割合が 1 音 1 訓に次いでおり、意外と高いことがわかる。

《みず・さんずい・したみず》に属する字について見てみると、内訳は音のみ 27 字、訓のみ 4 字、1 音 1 訓 68 字、1 音複訓 7 字、複音 1 訓 2 字、複音複訓 1 字で、1 音 1 訓が 6 割以上を占めており、上記の全体に対する 48.4%と比べてかなり高い。そして、訓のみと複音 1 訓は逆転しているものの、音のみと 1 音複訓と複音複訓の順位は同じであって、総じて上記の全体の内訳が《みず・さんずい・したみず》にも当てはまるといえる。1 音 1 訓の割合が高いということは、意味の認知もそれだけ容易な漢字群であるということであり、《さんずい》という部首が他のさまざまな部首に比べても私たちに比較的なじみの深い部首であるという印象をもたせるのに寄与している。

1．音読みしか持たない語は大きく 2 つに分類される：① [駅] 〔エキ〕、[感] 〔カン（じ

る)]、[席]〔セキ〕のように単独で用いて意味が理解されるもの。②単独で用いることができない複合表現のみから意味が推論されなければならないもの。ここでは前者のみを掲げる（複数の読みを持つ語は単独用法が可能なときの読みを添える）：愛、案、威、胃、意、域、益、駅、演(じる)、宴、王、翁、乙、恩、可、害、格、核、活、缶、勘、感(じる)、気、軌、義、儀、議、菊、吉〔キチ〕、客〔キャク〕、旧、漁〔リョウ〕、凶、京、菌、禁、銀、区、句、具、訓、軍、郡、刑、芸、劇、件、券、県、弧、個、碁、功、甲、酷(な)、獄、才、財、察(する)、雑(な)、詩、式、軸、質、朱、衆、銃、塾、術、殉(ずる)、純(な)、順、準(ずる)、序、章、象〔ゾウ〕、錠、職、信、粋、髄、是、制(する)、姓、性、税、席、籍、栓、線、禅、祖、僧、想、層、像、俗(な)、賊、他、対〔ツイ〕、隊、台、題、宅、段、地、茶、腸、朕、点、党、塔、糖、胴、堂、銅、徳、毒、肉、尿、念、能、脳、派、肺、漠、鉢、罰、閥、判、版、班、範、藩、晩、番、盤、非、碑、票、評、瓶、府、譜、部、服、福、兵〔ヘイ〕、塀、弊、弁(ずる)、法、棒、僕、没(する)、盆、魔、幕〔マク〕、膜、万〔バン〕、密、脈、妙、盟、銘(ずる)、紋、役、欄、陸、猟、寮、累、塁、類、礼、列、炉、労、論(じる)、枠、湾

これらのうち［堂］のように表外にも訓がない漢字はまさに字音〔ドウ〕で理解される以外にはない。[感(じる)、察(する)、殉(ずる)、準(ずる)、制(する)、弁(ずる)、没(する)、銘(ずる)、論(じる)、酷(な)、雑(な)、純(な)、俗(な)、] のように日本語の動詞あるいは「ナ」形容詞として活用に組み込まれている語は意味認知の観点からは訓読語に近い類をなしていると考えられる。

しかし、これらの中には複合表現が普通であって、単独で用いられるのは定型的・慣用的表現に限られるものもかなり含まれている。たとえば「名人の域に達する、活を入れる、禁を犯す、朱を入れる、若い衆、長幼の序、信を問う、骨の髄まで、是が非でも、想を練る、念を押す、判を押す、範を垂れる、弊を改める、弁が立つ、原稿を没にする、魔がさす、万やむを得ず、連絡を密にする、盟を破る、累を及ぼす、労をねぎらう」。これに類するものとして「お棺」「お坊さん」「お宅の犬」のように「お」を添えて用いることが多いものがある。あるいは［個］のように使われる文脈が哲学的なもの、「僕」のように自称に限られる場合もある。

また［劇］のように単独で用いられるのは「芝居」の意味に限られ、「激しく強い」意味では複合語しか許さない語もある。同様に［判］は「印鑑」の意味。

［乙］は契約書などで［甲］と対で用いられる限定語である。[凹]［凸］も「凹凸、

凸凹」など用法が限られる。［区、郡、県、府］は行政単位として単独で用いることができる。
妥〔ダ〕は「妥当、妥協、妥結」のような表現でしか用いられず表外訓〔おだやか〕はこれらの語の相互の関係によって間接的に理解されるに過ぎない。

［服］〔フク〕では意味が重層的に分かれる。まず「服」（衣服の意味）と「服する」に分かれ、さらに「服する」が服従の意味と服用の意味とに分かれる：

［服＝衣服］服、衣服、燕尾服、官服、軍服、呉服、式服、私服、正服、制服、僧服、被服、服地、服飾、服装、平服、喪服、紋服、洋服、略服、礼服、和服

［服する＝服従］服する、畏服、悦服、感服、忌服、屈服、敬服、降服、克服、承服、心服、信服、征服、叛服、服役、服罪、服従、服務、服喪、不服

［服する＝服用］服する、一服、着服、頓服、服毒

［委］には常用漢字としての訓はないが、「委員、委託、委任、委曲、委細」などでは、「ゆだねる、まかせる、つまびらかに」といった訓が意味の認知に寄与する場合がある。同様に［威］に「おどす」のように、表外の訓がよく知られている、あるいはよく使われるなどの条件がそろえば、訓が字音語の意味認知の過程に強力に働くことが期待される。［陳］にも訓はないが「開陳、具陳、陳謝、陳述、陳情」では「のべる」、「出陳、陳列」では「ならべる、つらねる」、「陳腐、新陳代謝」では「ふるい」と推測されるように、複合表現によるしか方法はない。また［具］は「道具、器具、雨具、家具」などのほかに、「具足、具備、具象、具体具有」などでは〔そなえる〕、「具申、具陳、敬具」では〔のべる〕が意味基底として認知される。

しかし、常用漢字表外の訓だけで、字音語の理解がなされるとは限らない。［謄］は通常「（戸籍）謄本」という語でしか使われないために〔うつす〕という訓を知ることはほとんどない。それが原本を写した文書であることは「謄写」という語によってかろうじて理解されるにすぎない。［騰］も急騰や暴騰で物価や相場について使われる特殊語であって、その訓・意「あがる」は反意語である急落や暴落との関係でどうにか理解されていると考えられる。

［活］は単独では「死中に活を求める、活を入れる」のような定型表現にしか持ちいす、表外訓「いきる・いかす」が「生活、活動、復活」を支えている。ここでは「生活」が共に「いきる」という同じ意味の語を結合した典型的な漢語として、意味の認知にとってきわめて重要な手がかりを与えている。同様に表外訓が複合語の意味認知を支えて

いる語としては［窮、究］〔きわめる〕（典型的に窮極、究極）、［渓］〔たに〕（典型的に「渓谷」）、［滋］〔しげる〕、［淑］〔よい・しとやか〕、［浄］〔きよい〕（典型的に「清浄」）、［漸］〔ようやく〕、［泰］〔やすらか〕（典型的に「安泰」）、［濯］〔すすぐ〕（「洗濯」）、［派］〔わかれる・つかわす〕（「分派・派遣」）、［浪］〔なみ〕（典型的に「波浪」）。［漢］は「中国」を意味する「漢語、漢方、漢籍」と「おとこ」を意味する「悪漢、暴漢、痴漢、熱血漢」で区別される。［準］は「めやす」を意味の「基準、照準、水準、標準」と表外訓〔なぞらえる〕の「準拠、準則、準用」で区別がある。［渉］は訓〔わたる〕が「徒渉、跋渉」、そして幾分かは「渉猟」を支えるが、「渉外、干渉、交渉」には働かない。［漠］は単独で「漠とした・たる不安」のように用いるが「砂漠、広漠」とは直接につながらない。［普］と［遍］はともに表外訓〔あまねし〕によって典型的には字音語「普遍」に現れるが、漢語としての認知可能性には幾分かのずれが見られる。訓〔あまねし〕は「遍歴、遍在」や「普及、普通、普天」を支えるが、「普請、普段」では前分［普］と後分［請、段］に分解しても意味を合理的に推論することはできない。

複音を示す漢字には漢音と呉音や漢音と慣用音など無標音と有標音の対立を示しているものがある。［庫］は表外訓〔くら〕が「倉庫、書庫、金庫、車庫、在庫」などの意味認知を支えているが、呉音〔ク〕は「庫裏」にのみ見られる有標の音である。［虚］は表外訓〔むなしい、うつろ〕が「虚言、虚実、虚心、空虚」の意味認知を支えるが、呉音〔コ〕は「虚空、虚仮」など特殊な有標音である。［罰］の有標音〔バチ〕は「罰が当たる」にしか現れず、同じ意味の「天罰、神罰」などでは無標音〔バツ〕が現れている。

2．訓しかもたない字はそれだけで理解することのできる和語である。ただし、［潟］のように単独では用いにくく、「干潟、新潟」という表現でしか現れないような字がある。［崎］は「洲崎、長崎」。［畝〔せ〕、坪、匁］は面積・重量(通貨)の単位であるから「うね」「坪数、建坪」を除き数量を添えて用いる。

3．1音1訓の字は常用漢字表の約半数を占め、音と訓が1対1で対応するように見えるために、私たちにもっともわかりやすい字であると考えられている。たとえば［水］〔スイ・みず〕で作られる漢語は「飲料水、汚水、海水、給水、下水、水泳、水源、水産、水車、水力発電、増水、淡水」など大量にあるが〔みず〕という訓はつねに「みず」という意味であり〔スイ〕は単独では現れない。［炭］〔タン・すみ〕でも同様に「採炭、薪炭、石炭、炭化、炭鉱、炭田、泥炭」など、〔すみ〕で理解されるしかない。

しかし、必ずしも音と訓の１対１対応で漢字の意味が認知されているとは限らない例も見られる。たとえば、［辞］は音が〔ジ〕、訓が〔やめる〕であり「辞職、辞退、辞任、辞表」などはこれでわかるが、「辞書、辞典、献辞、賛辞、祝辞、式辞、謝辞、弔辞、美辞麗句」などは表外訓の〔ことば〕によって理解される。［故］〔コ・ゆえ〕では音読み漢語はないようで「何故」が〔ゆえ〕の意味で用いられる程度であり、「故旧、故宮、故郷、故国、故事、故実、故人」のように表外訓〔ふるい、もと〕に支えられている漢語が圧倒的に多く、〔ことさら〕では「故意」のみがよく用いられる。その一方で、頻出する「故障、事故」は表外訓をもってしても理解が困難であり、これらの形で理解するしかない。［退］〔タイ・しりぞく〕では「退出、退去、進退」とは異なり、「退屈」はこのままで理解するしかない。後分［屈］〔クツ〕でも表外訓〔かがむ・まがる・したがう〕は「屈曲、屈伸、屈服」の理解を支え「退屈」の理解には寄与せず、字音語「退屈」は実質的に１音のみの単漢字とあまり異ならないと判断される。

［原］は音が〔ゲン〕、訓が〔はら〕では「高原、湿原、雪原、草原、平原」など漢語の後分として現れることが特徴的であり、漢語の前分ではほとんど表外訓〔みなもと、もと〕の意味で用いられ、造語力も圧倒的に高い：原案、原因、原価、原画、原型、原告、原産、原始、原人、原生林、原点、原簿、原理。

［年］〔ネン・とし〕は「年の市、年の瀬」のように暦の年と「年を取る、年の功」のように年齢の２つの意味で用いる：年月、去年、近年、昨年、新年、前年、年賀状、年刊、年始、年収、年頭、平年、忘年会、明年；弱年、少年、青年、成年、早年、壮年、中年、年少、幼年、老年。後述されるように、これと同様の区別は［月］にも見られる。

［油］〔ユ・あぶら〕は「油田、油脂、醤油」は訓読みで理解されるが「油断」は分からない。

［賄］のように音〔ワイ〕「賄賂、収賄、贈賄」と訓〔まかなう〕「賄い付きの下宿」が意味の区分に対応しているような場合、訓読みは音読み漢語の意味理解に役立たない場合がある。同様に、［津］では「わきでるさま」を意味する〔シン〕「興味津々」と「港、渡し場」という意味の〔つ〕「津々浦々」。

４．１音複訓の場合、異なる訓によって造語力には違いがあるのだろうか。

［映］〔うつる・うつす〕映画、映写、反映、上映

〔はえる〕出来映え、照り映える、夕映え

〔はえる〕は和語複合にしか現れず、漢語造語力はない。［栄］はこれを補完する形で働

いているように見える。〔さかえる・はえる〕は意味的に近く、かなりの造語力を示している。

「開」の〔ひらく・ひらける、あく・あける〕、[消]の〔きえる、けす〕は形の違いから複訓としたが、実際は自他の別を示す同義訓であって造語力の比較はできない。このように複数の訓は認められてはいるが、意味的に類似している語は多い。たとえば[汚]〔けがす・よごす・きたない〕、[陥]〔おちいる・おとしいれる〕、[危]〔あぶない・あやうい〕、[偽]〔いつわる・にせ〕、[魚]〔うお・さかな〕、[狭]〔せまい・せばめる〕、[脅]〔おびやかす・おどす〕、[教]〔おしえる・おそわる〕、[結]〔むすぶ・ゆう〕、[嫌]〔きらう・いや〕、[交]〔まじわる・まじる・まざる・かわす〕、[好]〔このむ・すく〕、[幸]〔さいわい・しあわせ・さち〕、[紅]〔べに・くれない〕、[香]〔か・かおり〕、[降]〔おりる・ふる〕、[産]〔うむ・うぶ〕、[指]〔ゆび・さす〕、[試]〔こころみる・ためす〕、[守]〔まもる・もり〕、[費]〔ついやす・ついえる〕など。[嫁]〔よめ・とつぐ〕でも「花嫁、降嫁、再嫁」など、2つの訓に実質的な意味の違いはないものと見られる。「なすりつける」意味の「転嫁」はこれとは無関係と見られる。

[覚]は表外訓〔さとる〕に支えられた漢語が圧倒的に多い：覚悟、知覚、感覚、嗅覚、幻覚、錯覚、自覚、臭覚、触覚、先覚、聴覚、不覚、味覚。これに対して〔おぼえる〕の音読漢語はなく「覚書、見覚え、物覚え」、〔さます〕は「覚醒」「寝覚め、目覚め、目覚まし、目覚しい」で字訓語が多い。

[過]〔すぎる・すごす〕過程、過去、過日、通過、経過；過度、過大、過多、過少、過激、過信、過密、過疎；看過

〔あやまつ・あやまち〕過誤、過失、大過、罪過

〔すぎる〕意味のほうが圧倒的な造語力を示している。

[懐]〔ふところ〕懐剣、懐紙、懐中、懐炉、懐胎、懐妊、山懐

〔なつかしい・なつかしむ〕懐旧、述懐、感懐、追懐；懐疑

〔なつく・なつける〕懐柔、

〔ふところ〕〔なつかしむ〕という意味では拮抗しているが、〔なつける〕という意味は造語力が極度に低い。

[角]〔かど〕角材、外角、鋭角、直角、角質、角度、角帽、口角、死角；角地、曲り角，

街角

〔つの〕互角（牛角）、触角、頭角；角笛、角隠し

角逐、角力（相撲）は表外訓〔あらそう〕を示すが、後者は略して角界、好角家に用いられている。

［干］〔ほす・ひる〕、干潮、干害、干拓、干満、干瓢、干潟

「干戈」「干渉」「干犯」は表外訓〔たて、おかす〕でしか理解できない。

［苦］〔くるしい〕苦、苦心、苦労、苦行、苦戦、苦難、苦肉、苦境、苦節、苦吟、苦楽、病苦、貧苦、粒々辛苦、困苦欠乏

〔にがい〕苦渋、苦汁、苦杯、苦言、苦笑、苦情；苦虫、苦味（味は当て字という）

〔くるしい〕という意味のほうが圧倒的な造語力を示している。

［空］〔そら〕空気、空襲、空中、空爆、空輸、航空機、上空、領空

〔あく・から〕架空、空虚、空位、空間、空室、空車、空席、空前、空想、空転、空洞、空白、空腹、空砲、空理、空論、虚空、真空

〔あく・から〕という意味が圧倒的な造語力を示しているようである。

［厳］〔おごそか〕威厳、厳戒、厳粛、森厳、荘厳、尊厳、端厳

〔きびしい〕戒厳令、厳格、厳寒、厳禁、厳刑、厳酷、厳守、厳重、厳暑、厳正、厳選、厳冬、厳罰、厳父、厳封、厳密、厳命、峻厳

〔きびしい〕という意味の造語力が〔おごそか〕よりも強いといえる。

［更］〔ふける〕深更

〔さら〕は字訓語にのみ用い、「更改、更新、更正、更生、更迭、更年期、変更、更衣室」のように表外訓〔かえる・あらためる〕を意味する字音語が多い。また［絞］の訓〔しめる〕は「絞殺、絞首、絞縊」に見えるが、〔しぼる〕は和語で「絞り染め、絞りかす、振り絞る」など字訓語に見える。

［細］〔こまかい〕委細、細菌、細工、細字、細事、細心、細則、細大、細緻、細別、細密、仔細、詳細、繊細、零細

「太(ふとい)」の反意語としての〔ほそい〕という訓に対して字音語が作られず「細腕、細面、細作り、細引き、細身、細め」など字訓語にしか用いない。

［勝］〔かつ〕圧勝、快勝、完勝、決勝、勝因、勝機、勝算、勝者、常勝、勝訴、勝敗、勝負、勝利、辛勝、戦勝、全勝、必勝、楽勝、連勝

〔すぐれる〕形勝、景勝、健勝、殊勝、探勝、名勝

〔かつ〕という訓の造語がきわめて多い。

［調］〔しらべる〕調査、調書

〔ととのえる〕調合、調整、調停、調髪、調味、調理、調律、調和、調節、調子、

調達、好調、強調、単調、格調、歩調

〔しらべる〕の造語力は〔ととのえる〕のそれに比べて著しく低い。〔ととのえる〕の字音語は「調子」を基底にしているものも多い。この漢字は名詞〔しらべ〕では「調べが済む」「下調べ」のように〔しらべる〕という意味でも、また「妙なる調べ」「哀調」「声調」などのように〔ととのえる〕もしくは「調子」の意味でも用いられるという点で注目される。

［暮］〔くれる〕歳暮、朝三暮四、薄暮、暮雲、暮景、暮色、暮秋、暮春

訓〔くらす〕の字音語はないようである。

［鳴］〔なく〕鶏鳴、悲鳴、百家争鳴

〔なる〕共鳴、喘鳴、鳴動、雷鳴

もともと鳥の鳴き声を表しているから、作られる漢語数が少なく「海鳴り、地鳴り、怒鳴る、鳴り物、耳鳴り、家鳴り、山鳴り」のように〔なる〕という訓で作られる複合表現が多い。

［優］〔やさしい〕　優雅、優柔（優柔不断）、優美、優遇、優先、優待

〔すぐれる〕優位、優越感、優者、優秀、優勝、優勝劣敗、優性、優勢、優等、優良、優劣

〔すぐれる〕は反意語〔おとる〕との関連で明確に捉えられ、それが造語力に反映しているのに対して、〔やさしい〕はそのような対立語がなく優男、優形という訓読語に本来の意味が残されているように見えるが、字音語は〔やさしい〕という訓とは直接的というよりも間接的にしか関係づけられない語しかない。優柔は優柔不断に吸収された形でマイナスの意味に変化している。また、本来は「やさしく、しなやかなしぐさをする人」であった俳優という語が、熟語の後分として女優、声優、男優、名優、老優などに使われているが、これらの語は訓ではまったく理解されない。

5．複音1訓の場合、音と訓はどのように分布しているのだろうか。

［悪］〔アク〕悪意、悪運、悪逆、悪事、悪党、悪人、悪筆、悪夢、極悪、邪悪、醜悪

〔オ〕悪寒、悪心、嫌悪、好悪、憎悪

「わるい、よくない、へたな」意味が〔アク〕に、「にくむ、気持ち悪い」意味が〔オ〕に対応しているようだ。

［図］〔ト〕意図、企図、雄図

〔ズ〕図画、図鑑、図形、図説、図版、図表、図面、地図、系図、縮図

おおよそ〔ト〕は訓〔はかる〕に、〔ズ〕は単独でも用いるが表外訓〔え・えがく〕に対応し、造語力は圧倒的に高い。ただし「図書、版図」に〔ト〕が後者の意味で現れている。

［便］〔ベン〕簡便、軽便、至便、不便、便宜、便覧、便利、利便；血便、検便、小便、大便、排便、便器

〔ビン〕音便、穏便、航空便、後便、船便、定期便、便乗、便箋、別便、郵便

おおよそ〔ベン〕は「やすらか、たやすい」「いばり、くそ」の意味に、〔ビン〕は「たより、手紙」「あるところへ行く交通機関」の意味に対応している。

［右］〔ウ・ユウ〕に意味の違いはなく、「たっとぶ」の意味では「右文」があり、「たすける」の意味では「祐筆、佑助」があるが、「みぎ」の意味では〔ユウ〕が複合語の前分には立たないという統字的な制約があるようだ。

［易］〔エキ〕交易、不易、貿易、易俗；易学、易者、易断

〔イ〕安易、簡易、難易、平易、容易

〔イ〕は「やさしい（容易である）」の意味に、〔エキ〕は「あらためる、かわる」に加えて「うらない」の意味にも対応している。複音を示す漢字ではこのように字音が漢音系と呉音系とで区別されている例も多い。［仮］〔ケ〕は特殊な仏教用語を除いて「仮病、虚仮（にする・おどし）」にしか用いられない。［夏］〔ゲ〕も仏教語「夏安居」のほかに「夏至」のみ。［会］［回］〔エ〕も仏教的な語でそれぞれ「法会、会者定離、会釈、会得」「回向、回心」に見られるのみで〔カイ〕が「あう、あつまる」「まわる、めぐる」の意味で圧倒的に用いる。［経］〔キョウ〕は「経典、経文、写経、読経」。［解］〔ゲ〕は「解脱」のほか「解毒、解熱」に見られる程度である。［眼］〔ゲン〕も「開眼(供養)、法眼、正法眼蔵」のように仏教用語のみ。［色］漢音〔ショク〕、呉音〔シキ〕では後者の音が仏教語「色界、色即是空」に現れるが、仏教語でなくても「いろ」という意味の「原色、変色」に対して「色彩、色紙、色素、色相、色調、色盲」や、「男女の愛欲」という意味の「好色、女色、漁色、猟色」に対して「色欲、色情、色道、色魔」のように後分では〔ショク〕、前分では〔シキ〕という分布が認められる。呉音の「金色」(コンジキ)や「すがた、おもむき」という意味の「春色、暮色、敗色、古色」に対して「気色、景色」などの例外も無論ある。

［街］は慣用読み〔ガイ〕が一般的で〔カイ〕は「街道」のみ。

［楽］〔ガク〕音楽、雅楽、楽章、楽聖、楽団、楽譜、楽器、器楽、声楽、能楽、邦楽

〔ラク〕安楽、快楽、喜怒哀楽、苦楽、行楽、極楽、娯楽、道楽、楽園

この字は「おんがく」の意味で〔ガク〕、「たのしむ」の意味で〔ラク〕のように読みと意味の対応が明瞭に分布している。

［月］のように音〔ゲツ、ガツ〕と訓〔つき〕だが、〔つき〕に天体の月と時や暦の月とが区別されているような場合がある：月光、月世界、月食、月明、月齢、弦月、残月、新月、満月、名月；隔月、神無月、月間、月給、月謝、月賦、今月、歳月、正月、年月、臨月。どちらの意味であるかは複合表現によって決まるが、音〔ガツ〕「1月から12月、正月」の月の名と「月光菩薩」にしか現れないので、暦の月に専用の音である。

6．複音複訓

［音］〔オン・イン・おと・ね〕では音〔オン〕、訓〔おと〕が基本であり「音域、音楽、音感、音響、音質、音声、音速、音程、音波、高音、雑音」など、すべて〔おと〕で理解される。〔イン〕は「訃音、無音、福音」など「しらせ」という意味と「母音、子音」という特殊な用語に使われるだけである。訓〔ね〕は字訓語「音色、声音、忍び音」で「ねいろ、声」の意味あるいは「本音、弱音、空音」で「ことば」の意味であり〔おと〕とは微妙に異なる。

［競］〔きそう〕競争、競泳、競演、競技、競合、競作、競走、競艇、競歩、競馬、競輪

〔せる〕競合、競売、

「競売、競馬、競輪、競艇」などからも音の違いが積極的に意味の違いに対応しているのではない。「きそう」と「せる」は意味が部分的に重なるが、「せる」の意味での造語はかなり限られているかわりに、「競り合い、競り売り、競り落とす、競り買い」などの字訓複合表現がよく用いられる。

［行］〔いく・ゆく〕移行、運行、横行、紀行、急行、行商、行列、吟行、行進、旅行、進行、走行

〔おこなう〕悪行、寒行、敢行、慣行、奇行、行状、強行、行政、挙行、苦行、言行、現行、行為、行動、試行、執行、素行、

これらの字音語は造語力が拮抗していることからも予想されるように、意味的に完全に断絶しているのではなく、「行く」から「行為すること」「おこなう、なす」のように意味的な連続が認められる。これに対して「行間」はの〔行〕は文字の縦列または横列という特殊な意味であり、「刊行、発行」「銀行」も〔いく、おこなう〕からは直接に認知することが難しい。

しかし、このグループに属する漢字は必ずしも複数の音と複数の訓が正確に対応しているわけではない。例えば［形］は音が〔ケイ・ギョウ〕で訓が〔かたち・かた〕であるが、意味の違いで対応しているとは到底考えられない。後者はきわめて類似した意味であり、前者にしても意味の違いで使い分けられているわけではない。呉音の〔ギョウ〕は有標の読みであり、あえて言えば「すがた」という意味で「人形、異形、印形、隠形、鬼形、僧形、俗形、遺形、裸形」などに見られるに過ぎない。

最後に【水、氵、氷】《みず、さんずい、したみず》に属する字を少しく見てみよう。［滑］〔すべる〕「滑降、滑走」、〔なめらか〕「円滑、滑車、滑沢、滑脱、潤滑(油)、平滑」。表外訓〔みだす〕は「滑稽」に見られるとされるようだが、私たちにとっては「おもしろおかしい、おどけ」であって、〔みだす〕という意味を認知することはできない。［潤］〔うるおう・うるおす、うるむ〕は複訓としたが、さらに「つややか、つや」の意味が加わって「湿潤、潤滑、潤色、潤沢、浸潤、豊潤」などに実質的な意味の区別は認知されず、造語力という点では「もうけ」を意味する利潤と比較できるにすぎない。［潜］〔もぐる〕「潜行、潜航、潜水(艦)、原潜、潜望鏡」、〔ひそむ〕「潜入、潜伏、潜在、沈潜」。造語力に大差はない。［滴］の〔しずく〕と〔したたる〕は双生語のような関係にあって「水滴、一滴、雨滴、滴下、点滴」など造語力自体が高いとはいえない。［氷］の〔こおり・ひ〕で後者が古語的なニュアンスをもつことを除けば同義であり造語力を問題にすることはできない。［治］では音〔ジ、チ〕、訓〔おさまる・おさめる、なおる・なおす〕のように複音複訓であって「治安、治世、治水、自治、治績；治療、治癒、完治、全治」、「政治、退治；療治、根治、主治医、湯治」のように造語力が拮抗していることは、「統治」〔トウチ・トウジ〕、「不治」〔フジ・フチ〕のように読みが2通りある複合語からもうかがわれる。

4．まとめ

形字法的な観点から、日本の常用漢字、とくに形声字に焦点を当てながら、独体字・合体字の構成に関して、いわゆる部首を意味範疇認知情報単位、音符を音声認知情報単位、字訓語（音読みしかない場合は字音語）を意味認知情報単位と捉えなおすことによって、漢字の認知文字論的な分析の可能性を示した。

部首の種類は多岐にわたっているが、分布にはかなりの偏りが見られる。画数の少ない部首ほど、認知しにくく、意味範疇情報を担っているとはいいがたいものがきわめて数多く存在する。しかし、多数の漢字が属している部首が意味範疇情報単位として十分

に機能しているともいえない。多数であるがゆえに、必ずしも当該の意味概念にうまく入りきる漢字だけが収容されているわけではないからである。そして音声認知情報単位としての音符は十分に機能しているとは判断されるが、意味の共通性を認知させるほどの体系性をもつには至っていないことが明らかになった。

このように部首が意味範疇認知情報単位として十全に機能しているものから、さらに文字情報検索指標へ、そしてさらに単なる文字構成要素となってほとんど字形の中に埋没し、それと認知するのが困難なものに至るまで、さまざまな機能の仕方を見せていること、しかしながらこのような状況があるからこそ、これらの意味範疇的あるいは音声的情報だけではなく、字訓語や字音語からなる複合文字表現のもたらす情報をも総動員して、漢字の認知プロセスが成功裏に行われていることを明らかにした。